

川柳の雑誌

麻生路郎★主宰



Pensoj fuaras trans la land-linion

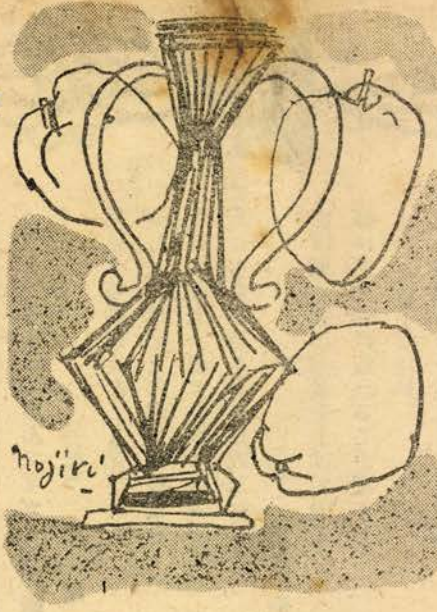
The Senryu Zasshi No.338

七月號

窓口談義

芸術と非芸術

京の島原で、ほんと町の大芸者の手拭の人形ぶりを見せてもらった。黒、白、紫、浅黄と段々。そして材料と云え



だらに染めてある一枚の手拭の黒い部分を髷に、白い部分を顔に、紫の部分をきもの、浅黄の部分をきもの裏地に、たちまち一箇の人形が目の前

ば手拭の外に、髷をとめるために、要楊子を二三本用いただけである。それもその要楊子が、かんざしとしての役目を果たしている訳である。まことに簡単な

人形であるが、それを腕首に持つて、一寸ねじらすと、裾さばきもあざやかに艶々しい女の姿態となった。これに「合邦」の玉手御前、太に合せて人形ぶりを

に見せてもらったが、生命が躍動して僅に一枚の手拭で作った人形とは思えなかった。更に、「堀川」のお俊を見せてもらったが、髷の形が、変つて遊女姿、同じ手拭でつくったとは思えぬようなお俊が出来上がる。これ又生々として私たちを魅了して去った。五十幾年をこの道に凝りに凝った老妓の腕は全く文楽はだしという演技ぶりであった。

次に、同じ部屋で前帯にうちかけ姿の太夫を見せてもらった。高尾の昔を偲ぶとまではいかぬが、容姿は確に堂々としている。何んとか太夫とか云ったが源氏名は忘れてしまった。美人の列に入ると

は思うが、ツルリとした化粧顔におちよほ口をした小さな口、(近ごろはやりの口紅で口を大きく見せるのとは対照的)、どこことなく冷たい感じのする、まあ博多人形だと云えば一番近いだろうと思ふあで姿である。美しいと云えば美しいには違いないがどこから見ても人形である。

以上二つの場合を比較して見ると、前者は単なる一枚の手拭で作った人形に、いのちを吹ッ込んで、私たちの胸底深く迫るものがあり、後者は生きた人間でありながら、土でひねった人形の美しさだけしか発揮していないのである。

私達はこの二つの例によつて芸術と非芸術との差を識らなければならぬ。芸術の持つ魅力が、どんなものであるかと云うことを胸底深く畳み込まねばならない。

そこで私は川柳に就いて考える。川柳は何処までも前者でなければならぬ。私たちが描写する僅々十七音字は一句一句にいのちを吹ッ込み、第三者の胸底深く迫るものでなければならぬ。句姿は美しく整わなければならぬが、句姿がいかに美しかろうといのちのない土くれの人形であつてはならないのである。しかし、

(路郎)

不朽洞句帖

麻生路郎

銀閣寺にて

おゝそうかこも拝観料が要り

京言葉あれでおこっているのなり

茶漬でもいいさと逢いに行く身なり

老妻のお供三本立てにする



豊中市 戸田 古方

日が暮れたらねるんだったね老子さま
いつまでそうしてるんですガラスの蛾

大阪市 西尾 栗

意見する儂がまだ遊びたし

はしゃいだあとの淋しさ妓にも

盲人大会矢張り会旗うちふって

あたらずさわらずを見破られ

大阪市 市場 没食子

春は逝く候の酒量を上げて逝く

夢にさえ春は疲れることばかり

長男大学進級

父の跡継いでお前もくすりやか

学会へ家内をつれて上京

駅の時計と違う夫婦の腕時計

水のない華嚴の滝のあほらしさ

陽明門まだ徳川の匂がし

横浜市 福田 山雨楼

信仰するどころかヤソを批判する

痰を焼く煙罪障消えよとて

忘却の部へ毎日を追遣ろう

何負けてたまるか目にも見えぬ菌

息苦し願うところは安楽死

入口は開いても飛べぬ籠の鳥

兄隆の計報におどろく

図らざりき酒乱の兄は肺で逝く

ホノルル 内藤 草一郎

いゝ方であつたと別れてから分り

口説くコツ聞けばやっぱり金が入り

あざやかにぎつちよ草門流をいけ

外出ヘシガーくわえた小さい見栄

借る気の説明微に入り細に入り

飽きた眼に親切さえもわすらわし

米子市 三鴨 美笑

初めからあぐらで飲める人を訪い

血圧が高いからとて社長去に

集金もこんな所が日延べする

ホノル、市白 砂 旋風

母の日に堕したことが胸を刺し

母の日に十人産むと怖れざり

看護婦も女産んで見度くなり

大阪市 須崎 豆秋

みおつくしの鐘

毎夜十時に大阪市片の塔上から

子らよ帰れと母の愛の祈りをこ

めて鳴りひびく

降り出さぬうちに帰れとみおつくし

親仁へも帰れくとみおつくし

みおつくし母さんが未だ帰らない

東京都 前山 北海

肥料買う金で買う酒妻拒み

雑用の私宅伺いが気をほぐし

次々に病んでリベート身につかず

死んだかと全集広告見て慌て

皇太子と握手女優に出し抜かれ

隙見せぬ素顔は笑ます夫亡人

親切なバスガール讃える金が出来

大阪市 正本 水客

脊伸びした序バレーの型になり

恩師すぐ万年筆を出し給い

歩巾あわして悲しみを見せまいとする

私小説けい類がない様に書き

また後で来ますと女中話好き

現金を持ってる強さ黙りこみ

お向いも掃除か窓と窓の顔

大阪市 丸尾 潮花

バーの雨泣かせてくれるひとと来ず

盗みしてまでも捨てられまいとする

愛情にそむけばきつい風あたり

どうしようもないに女は手をひかず

大阪市 北川 春巢

いさゝかの妻のおごりは落花生

洗濯をするのが好きな母娘にて

老いらくの恋は入歯の話もし

三味線を畳へ置けばあぶながり

夢持って金のないのは苦にしてす



大阪市 武部 香林

老ぬれば老いの仕事のあるを知り

組合員だけが働くように云い

ハンマ持つ手に精神貴族さげすまれ

出雲市 尼 緑之助

市議落選

しみぐとひたる敗戦の夜の風呂

下関市 弘津 柳慶

当選へ刑事そのまゝ連れて行き

ハンサムへ一人反抗している妓

鳥取市 杉谷 湖山

川一つへだてゝ税の高低の

手相見の目鏡半分ずれて居る

兵庫県 小西 無鬼

鳥取砂丘

アベックで坐れば砂丘映画めき

娘の子泊めてや等と恐ろしや

支払は別々に出す女学生

藤端桜並木

改めて恩師と共に見る桜花

京都市 大鶴 喜由

あやめ池女をかわるがわる連れ

おかしきは信する友にだまされる

百円を倍に見せたい贈物

ごみ箱に捨てたい人へ女惚れ

吹田市 野本 吞水

一坪の店で大阪食えるところ

晩婚の悔何時迄を子に稼ぐ

機械化をよそに算盤塾へやり

母の日も妻はみづからすしを巻き

尼崎市 小林 文月

門衛の不在めがけて早引きし

若かりし我輩翁とかゝれもし

三面鏡後ろの禿も教へられ

茶漬だけ用意をせよと又電話

大阪市 富岡 淡舟

大阪の暮色精神病の如く

貫祿の相違は軽くあしらわれ

人生の旅路の果ての下足番

奈良県 飯降 白香

ニコヨンも若葉の雨にぬれてゆき

指をかむしぐさ覚えて生徒のうれい

山口県 長野 井蛙

零落れた身を犬にまであなどられ

席のあるのにアベックは狭く掛け

岡山県 直原 七面山

看護婦の臍が安静を保たせず

妓みな初生な男のそばに寄り

独り者苦もなさそうに飯を炊き

切られた首を松の木へ吊り

デットボールで逝ったを本望とは哀れ

ホータルコイと妻若し

大阪市 西森 花村

童謡も小唄もいけて未亡人

小刻みの工賃明日の米買えと

鳥取市 河村 日満

この頃を夫婦でれこで子を叱り

焼酎の力自転車共転び

接待婦うんとこしよと動くなり

接吻をしたと日本映画でも

兵庫県 田代 尋四

梯子段の途中でキッスして帰り

徳島県 姫田 夕鐘

女将等が芸ひとすじを馬鹿にする

旦那来て即席カレーの宵となり

手品のように帯のあいから金を出し

岡山県 福島 鉄児

入学の一番小さいのが我が子

女房も持たないうちに禿かかり

長女上京

母親として手荷物の数がふえ

東京駅にて

発車ベルしっかりやれと言に残し

井口寿人氏町長当選

戦塵を落す平和な湯があふれ

大阪市 谷内 一草

憂うつが吹き飛んでから三枚目

憂うつなところがとっても好きだとさ

お伽話のとうり砂丘つづいてる

大阪市 福本 嗣骨



へそくりを腹にぬくめたまゝ頓死
靴下をぐいぐい履いて意地があり

大阪市 榎南夏六

えへら〜と点を稼いでいる男
お見合の席に勝気がかくされず
代表はおちよこちよいにさしておし

手錠とは冷たきものよ出来心

下関市 阪田良坊

倉敷市 木村千容
気味悪いほど進言が容れられる
手紙の返事いつも電話で
忘れたへ小言忘れてやれる年

へそくりの位置が変つてゐるのに気付き

未亡人ですとはっきり求めている

武庫川の泥水を見に来た如し

面影は波紋の広がり似てあわく

疎遠から箱さげてひよっこり来

倉敷市 田垣方大

大阪市 西 いわを

葉桜の候にて候呑み仲間

高女生一人の時のしおらしさ

文才があるのか電車の中で書き

孤々の声だけは人並だった筈

こうきたらこうと帰宅のベルを押す

岡山市 横部牛歩

下関市 石川侃流洞

いれてやった市議の自動車のほこり

列車事故浮気の連れが妻に知れ

無遠慮にズイと言うのも記者稼業

千円をすかしてつりをくりやほった

岡山市 服部十九平

ビッグニュースにしたは給仕のききかじり

取り柄ない妻何事もかしこまり

発車ベルもう女ども食べている

落選の疲れがどっと出る若葉

石川県 那谷光郎

伯母様が今日仲人の格で来る

大阪市 安岡珊瑚枝郎

縄とびへ妻の若さがとんで見る

岡山市 大森嫋句楽

あの奥でこうして一杯やると決め

家出の娘さとし姉警も涙ぐみ

尻軽く動くは下戸の養子なり

本気で飼う気もない金魚池にもせず

義手でたわしを売って生きる身の

落第の孤独で春をもて余し

広島県 山田季賛

石川県 野村味平

熊本県 有働芳仙

退院のバスの車窓は麦が伸び

労基法のあるにはあれど徒弟の身

大学までやる気妄想猛々し

釣竿でバスの車掌に意見され

そら豆の筋を添乳にたのまれる

金魚鉢五月の空を抱擁し

大阪市 山本葉光

大阪府 木村水堂

澄み切った人生綱になって死の

女が偉く見える失業

死の旅になるとも知らず喉いで出

酒癖を幹事大外刈で投げ

嘘でない瞳を覗き合う仲

ふところ手してもボスはボスらしく

ぼうふらは皆蚊になれり失業苦

弱い者いじめの世なり逆えず

遊ばない客と見抜いて寄って来す

高知市 大西迷窓

すこし智慧あつて疑い深くなり

熊本県 楠田英子

相愛の足雑草へ投げ出され

強請をしないと寄附へ五六人

はるかなる道唯静けさを求めあり

端に金などと言えない生活向き

猫も夢見ているらしく髭うごく

堺市 八木摩太郎

大阪市 地俱山風楼

丁寧な言葉の礼の水息し

二号邸で話のはずむ市の予算



坂一の茶碗の方は前へ出し
大仏をメートルにするややしき

倉敷市 水谷 谷 水

寛大な旦那の世話で再婚し

あんな人達が包んだアメだった

倉敷市 相原 一 善

あゝしんどかったと見合の帯を解き

押売を娘わけなくおっぱらい

この辺で阿呆になって生きるとし

岡山県 田村 藤 波

麦と米ほどの相違の姉妹

晩年になっても負けん気がたゞり

舞台では敵役楽屋ではあなた

岡山県 岡田 夜 潮

物貰い麦は要らぬとぬかしたり

ランドセル見たさに動く水枕

岡山県 坂井 三 葉

此の人が父さんですと写真帖

遭難の現場へ雨が降り続き

あるだけの皿を並べた妻の留守

岡山県 岡村 牛 耕

娘ばかりになればおい君なんだ君

子と親が比べられとる参観日

大阪市 稲葉 鳩 花

ヘップバーンモンローなどとまだ嫁かす

パトロンが変ったらしいイヤリング

茨木市 下山 清 潮

安定所此処も役所の中だった

税ム吏の名を女給が知っていた

退職金デパート二三べん廻って来た

去った椅子まぶたに再三浮んで来

すてられた様に魚釣ばかり行き

これからは一円などとあなどれず

岡山県 本田 恵 二 朗

白痴美と言う鼻筋の冷たくも

島一つ紫にして陽が去りぬ

失職へ顎ひげばかり延びるなり

稲荷様信じるひとのイヤリング

一票へ明治元年おんぶされ

大阪市 真鍋 一 瓢

気の毒な人へも柳緑なり

吊皮の下で近代文学史

哀しさは艱難汝衰弱死

路地ちよっと這入れば子と子歩かれず

京都市 松川 杜 的

給食を長男亦も残して来

金魚の死朝の平和をかき乱し

釣の子等一人は汽車に手を振って

大阪市 永田 六 龍 子

汚職記事今更良心等おかし

豊中市 村上 ゆ ず る

遊女とは悲しきものと知る室津

借金をしいく浮気やめられず

恭敵の帰る夜半は雨になり

大阪市 佐野 白 水

北摂山荘にて

炭を切る音さえ気になる程静か

大阪市 尾野 お さ む

さりげない微笑女の意地を秘め

海岸の春恋人のひざの砂

芸術をすてた挿絵で食っている

大阪市 児山 紫 郎

点になるまでハンカチを振っていた

手袋でズボラな握手して帰り

更年期好きなお酒の量きまる

橋一つ渡れば街という八百屋

姑が頼んで見ても産まぬなり

段梯子浮気がしたい肩で降り

倉敷市 松村 万 古

仙人を落した魅力妻も持ち

春雨も乙なものだが屋根が洩り

本人は宴会代理は御焼香

倉敷市 藤井 春 日

我家へは内証にしておくダンス靴

強引な方ネと女もうゆるし

所望され膳を股いだかくし芸

大阪市 木口 賀 峰

判らないけれどもなすく義理の能

焦点を突いてみんなに煙がられ

アベックに程良くゆれる貸ボート



良い酒を飲めと老人気をつかい

岡山市 津田表太楼

節付けて三面を読む父老いし

二三日金があるから気が尖り

じぐざぐに潜って通る白い羽根

米子市 小西雄々

百円のコーヒ―脂粉の中で飲み

銭湯に二号一番乗りをする

米をとぐ手とは見えない舞扇

岡山市 浜野奇童

母さんの形見を抱いてた自殺の娘

堺市 高崎雄声

踏切は飯を食い／＼上げおろし

春うららすみれたんば、嫁菜など

岡山市 三枝一策

干し物が濡れてますよと雨蛙

甲から乙乙から丙が着て嫁ぎ

姓名を変えて遊んで喰う心算

大阪市 森文夫

愚かさを妻と笑った夜業の灯

帰省した矢先に金を借せと言う

大阪市 吾郷玲人

十円で行けるとこ迄出迎える

漸くに妻の口から避妊薬

同窓会母校を改築する話

衛生局勤務車を曳いて出る

西宮市 若本多久志

いつの日に買えるか電蓄なでてる

貸ボートあゝアベックの多いこと

島根県 藤井明朗

自転車に乗れば酔うてるとも見えず

岡山市 永松東岸子

大掃除たたみを出しただけですみ

機械あみ足を投げ出す程に馴れ

真剣に離婚の記事を妻が読み

倉敷市 野田素身郎

人事だから敵を愛せよなどといえ

課長も一緒だったと麻雀言分し

倉敷市 安原斜木

産声は実は夫に云えぬ子よ

集金の嬉しさ釣を出し損ね

神戸市 岩田一夜

手放した土蔵の白き眼に痛し

一坪の畠仏の花を切り

大阪市 神谷凡九郎

さりげない仕草へ妻の愛信す

何かするつもりへ今日がくれて行き

貸ボート一人ぼっちの重みなり

大阪市 木村十悟

いさかきも無くスリルにも欠けて生き

大阪市 伊達堰子

雨宿りしに來た話だと判り

大阪市 不二田一三夫

おくやみも言えないくせにウシユクダラ

口だけが真赤に見えて女来る

あの美声あのスタイルでバスガール

同舟近詠

松山市 前田伍健

詩の価値を論じお米の値は知らず

当選の写真明治の顔ばかり

狸談縦横うそ堂々と面白く

大阪市 橋本緑雨

算盤も時々持てきようもすぎ

かどっこの家で新種のバラを植え

子のない夫婦今日別々の家を空け

長野県 高峰柳児

頼りない智慧を他人は貸してくれ

温泉で同病どっちもい身分

弟子とって二号は生活力を持ち

東京都 阿部佐保蘭

名人の貫祿隙を少し見せ

今日からは笑顔見られぬ雨縁

中島氏の逝去を悼む

堀英四郎先生語る

八十二まだ／＼英語教える気

御主人は寝てばかりゐる公休日



火事の人生

東野 大八

某日、社の若い記者の一人が、蒼い顔でつくねんと坐っている。あんまり元気がないので、「金でも落したのかい」とときくと、とてもないといった顔付で、こんな話をした。

油の販売をやっている彼の兄貴が、ふとした不注意から火を出し、一物も取出不まいまに丸焼になってしまった。しかし、それも兄貴の家だけならいいが、隣り近所の家四軒も類焼させてしまった。油に火がついた火事だけに、火の廻りは凄く速く、その四軒も着のみ着のまゝの厄に遭ったというわけ。とにかくその御近所様にまことに申訳がないとあって、米二俵を工面してその罹災者に見舞したが、そんなことより裸にした責任をとり、賠償をしろうといっ

てきかないんだそうである。おかげで弟としての立場から、捨てゝもおけず、自分ももっているあるったけの服や着物を金に替えるべくきれいにたたき出した。消防署は時大災だから、消火に使った

油代をよこせと責めるし、警察は警察で、どうして火を出したとムゴイほど油をしぼる、歌舞伎に油地獄お艶殺しというのがあるが、全くの油地獄ですよ、という。

聞いた私は、相手の胸中を想って慰めの言葉も知らなかった。火事を出したら七代崇られるということをしるが、成程とも感銘した。

ところで、火事といえば、私も一度死にかけたことがある。先頃来校した大井正夫さんにも話したことだが、私の一本きりしかない右腕の手の平に、ポツリと黒く今でも印が一つついていて、火に巻かれて脱出するとき、叩き碎いた窓の硝子の破片なのである。

新京の新聞社に居た時のことから、もう十五六年もの昔になる。当時の新京は、新興都市のせいか、今日同様の大変な住宅難、どういふ伝手か知らないが、社では長春座という劇場の楽屋の一部を借りて私と他三人のチョンガーをそこに入れていた。

その夜、私は同宿三人のうちの二人と強か酒をきこしめして、夜中の二時ごろその部屋に引あげてきた。留守番の一人の男は、その時刻までせつせと勉強していた。不眠症の彼はそうしていなければ眠れなかったのである。

「火事だ」

という声で私たちはやがて叩き起された。アホいうな、と私がどなって不眠症の男にくっつかると、思わず煙にむせた。気がつくと思は本物だった。濃い煙が入口の戸の隙間から凄じい勢いで浸入してきている。スワッ!と酔いもふつとんで立上ったのはよいが、入口のあたりが燃えているなら、逃げる道は窓しかない。然しその窓は二重窓で小さく、しかもこの部屋に住んでから開いたこともない煤けた硝子戸だ。まん前がすぐボイラー室だったからでもある。しかし私たちは、力を合せてこの戸を必死で破りかゝったが、敵丈無類、それでもやと口が開いたときには、火は既に入口の戸を焼切っていた。紅蓮の魔の舌、そんな形容がぴったりだ。もしこの戸がブリキ製でなかったら、私たちは窓を破る暇もなく焼死んでいたにちがいない。

この火事で六人が焼死、四人が重軽傷を負った。死んだのは看板描きの老人一家二人、劇場の雇人である満人二人、そしてその日に限って泊りこんでいた満映宣伝課長のKである。看板描きの親子は、双方とも一旦外に出たが入口二つから出た、めお互いを求めて部屋に引返し煙に巻かれてしまった。母はフトンをかむって窒息死、満人二人は地下室でバクチをうたいて蛙の煙製みたになつてしまった。そしてもう一人のK、これが最も気の毒な最後をとげたのである。

彼は隊長になったばかりで、これを土産にして、嫁取りに内地へ向う処を、同劇場の支配人が社交上、立寄った彼を接待して酔ったまぎれに彼は泊りこむことになった。これがイケなかった。支配人の方は勝手知った小屋の事とてうまく逃げたが、Kは酔っていた上、近視三度の大事な眼鏡を飛ばしてマゴマゴしているうちに煙に巻かれてしまった。

鎮火した翌朝、私は彼の死体を眺めたが、それはまるでロダンの塑像そのまゝ、片手を高く空間にさしあげ、祈るような姿で黒焦げになっていた。焼け落ちた窓枠の向うに、大陸の二月の底ぬけに青い空が、ぐんと拡がって、その死体はまるでその大空を祝福しているかのようなポーズともみえた。

罹災者であるわれわれ四人は、みんな記者であつたのでこの火事のニュースは断然他紙を圧しているが、出火原因については何も出

なかった。というのは、これは私人の今もって胸に抱えている秘密だが、失火の本尊は焼死した看板描きの老人だった。彼は私同様酒が好きで毎夜仕事のたびに、ニカラを溶かす七輪でヤカン酒をあふっていたものである。その夜も私はハッキリと、いこつた炭火の上にかゝっているいつものヤカンを眼にしていた。酔った彼は、火の始末を忘れ、そこに用す看板のハギとった紙屑がとびこんだ、出火場所がその宣伝部の廊下だった。けに、これには絶対誤りはなかった。然し、火事の記者で最も重要な出火原因ではあるが、私は誰にも語らずしてペンをとって、触れもしなかった。劇場主から贈られた花輪や大枚の悼弔金を、その老人の仏前に眺めて、私は今もって、それでよかったのだ、とくりかえし自分を納得づけている。ともあれこの火事で私は素裸になった。だが社や私の出入り先の各会社官庁から過分の見舞金が続ぎ、久しく酒手には困らなかった。

この大火事で劇場側も罹災者も何一つ持出せなかったが、決死の映画技師が身をもってわずかに運び出したフィルムが四巻あった。そのフィルムはなんと飯田蝶子主演の「偉大なるナンセンス」というのが題名であつた。



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔一五九〕

子澤山ニツクネームて母も呼び

(玉兎)

「オイ、チビ、僕のミットを早く取って来なくッちやダメじゃアないか」と兄が云うと、おッ母さんまでが、ツイつり込まれて「チビちゃん、御飯ですよ」とか「チビちゃん早くしないと学校遅れますよ」とか、ニツクネームで呼ぶようになるものである。

〔一六一〕

舌を出す癖は娘のときのまゝ

(水客)

娘と云うものは、一寸したしくじりをやっても、「アラ、困ったわ、わたしどうしまししょう」と云う。そしてチラリと舌を出す。何んかの信号のように、チラッ舌を出すのを見せられると、ちっとも困ってはいないように受けとれるのであるが、あれで真剣に困っているのであらう。

〔一六〇〕

水族館食気放れて見て通り

(一颯)

一読はおえましくなる句である。水族館ではいろんな魚類の海中や海底での棲息状態を知ることが出来て興味が深い。小さな魚が群をなして泳いでいるのを見ると美しい図

小遣いがないのよ」と云っては、ペロリと舌を出されては貧弱なサラリーマンにとってはやりきれないであらう。なか／＼面白い句である。

〔一六二〕

ヤットコシヨ云えば女中が笑いこけ

(千客)

ヤットコシヨだけで、老人であること、その老人が、立ち上るのに思わすヤットコシヨといかにも大げさな掛け声をしている姿が眼に浮んで来るではないか。そして、女中が笑いこけるのを見て、老人自身は一々ヤットコシヨと云わねば立ち上れない自分の老い込み方に苦笑を禁ずることが出来ないのである。滑稽な表現形式は探っているが、老人の悲痛な叫びを巧みに詠んだ句である。

〔一六三〕

あきまへんなどと芦屋へ居を構え

(水堂)

大阪あたりでは「どうだす」と云えば、「イヤ、さっぱりあきまへん」と云うのが、一応の挨拶である。「どうだす」は「どうです」で、「あきまへん」は「ダメダ」と云う意味の大阪の方言であるが、この句は「あきまへん」などと云うても、云うてる人自身もホントにあかんとお思っているが、聞いてる人も、そ

の人がホントにあかんと云うてるとも思っていないのである。と云う訳は「あきまへん」などと云うても阪神の芦屋に堂々たる居を構えていることを知っているからである。方言を巧みにこなした句である。

〔一六四〕

旅樂し前も隣も女性です

(方大)

多分、汽車の座席なのであらうが、この句の場合、特に汽車の座席でなくても一嚮差支えないのである。兎に角、前も隣も女性であることが愉しいのである。コレは旅へ出たと云う解放感が急に異性の匂いを希求するのであって、男でも、女でも同んなじなのである。と云ったところで変体性のような実行性を發揮する訳ではなく、夕闇に月見草のはのかな匂いにあるものが持つにも等しいくらいのものである。これでも充分楽しいところが旅は一種の魔物に違いない。

〔一六五〕

二つ頼めば一つ忘れる附添婦

(甲馬)

なか／＼気の利いた附添婦もいるにはいるが、その多くが社会生活からハミ出されたような存在で、附添ズレをしていて、尻は重たく、慾には眼がなく、おしゃべりとサボ

ルので、日を消している。そして少しく面倒になるとサツ／＼と引揚げて行くのである。たま／＼気のよいのがいても、そんなのは患者から用事を頼まれても、この句のように二つ頼めば一つは忘れて来ると云うシロ物である。穿ちの句。

〔一六六〕

素うどんへくつたくなの子が並び

(いさむ)

「おいちい？」
「ウン」
「こぼさないでネ」
「ウン」
「ヘイ、コレは兄ちゃんの」と云った風の家庭風景である。素うどんを前にしてくつたくなの子どもたちが食卓に押し並んでいるさまは、いかにも平和そのもので、どんなに忙しい思いをさせられても母にとってコレ以上の幸福はないのである。この句の面白さは天井でも、うな井でもなく、素うどんであることである。

〔一六七〕

樂天家のクラゲは磯に置去られ

(一颯)

海中にゆらり／＼と漂っているクラゲを樂天家と親たのは作者の主観である。磯辺を散歩しているとよく、白い砂の上にきら／＼光るクラゲを見かけるものである。誰かの

いたすらで、磯辺に投げ捨てられたのであろうが、クラゲを楽道家と観るのも、置き去られと云う下五の表現も擬人法の面白さであって、内容から云うと、クラゲが磯辺にあると云うだけのものでは何んの變哲もないが、擬人法で表現されてあるためにこの句に一種のユーモアを感じさせられるのである。

〔一六八〕

大学へやれば酒呑む様に
なり
(ト占)

学生のくせに、酒なんか呑む奴があるかと云うと、
「女の子だってビールを浴びるほど呑むよ」
と黙ってはいない。

「僕なんか三本ぐらい呑むと真赤になるんだ。はずかしい位だ」

ヤレ／＼、大学へ行ってもらってるだけでも並み大抵ではないのに、その上に大酒でも呑まれてはまったものではない。親のふところも考えないで、酒を呑むのも社交上必要なんだそうだ。ついでに汚職のけいこなどもして、これもこれからの人間の生きる道だよと云うかも知れない。

〔一六九〕

名刺には社長あれ／＼掃除もし
(摩天郎)

敗戦後、安っぽい会社が続出した。会社があれは社長のあるのが当然だが、給仕兼社

長のような社長がいたるところに見うけられた。この句もそうした社長を詠んだ句である。

「あれ／＼掃除もし」で、デモ社長をいかに描出していい。

〔一七〇〕
左手でよかつたねーと怪我見舞
(侃流洞)

「機械に挟まれたそうだな」と云ってベットの横に立つ。

「ええ」
と僅に上眼をつかつて見舞に答える。

「まだ痛むかい」
「ホータイを仕替える時はつらいです」
と、いかにも痛そうな顔をす

る。
「危なかったなア」
「ホントにいのち拾いをしました」

「しかし、左手でよかつたねえ。不幸中の幸だというやつだなア」
こんな会話が、ちぎれ／＼に続く。穿ちの句である。

〔一七一〕

麦秋の往来釣師に邪魔が
られ
(越鳥)

麦秋の往来は細いアゼ道までリヤカーが来る。自転車が来る。流れ川で静に糸を垂れている釣師は、時々腰をあげねばならぬ。

そこを捉らえた田園風景の一トコマである。街道から来る白い砂埃りや空の青さまで

が見えるようだ。「麦秋の往来」は「むぎ秋のゆきき」と訓むのである。

〔一七二〕

秀げるのは痛くないのが
取柄なり
(麦太楼)

詩人は感じられぬが、ユーモラスな句である。いつも帽子を放さぬのもそれがためである。写真を撮すとなると、ワザ／＼帽子を被るのもそれがためである。

「寝る前に、注射すれば朝眼が覚めたら黒髪ふさ／＼」と云う薬でも売出さんものかと云うのが、秀げた人達の世界共通の念願に違いない。禿げてる人は善人だよと自分に云い聞かした位で満足出来るものではない。

〔一七三〕

へそくりの言譯妻は聞いて
いず
(おさむ)

この句を一読すると従来のへそくりと云うものの考え方は「へそくりの言訳夫聞いていず」の誤植ではないかと思えるが、決して誤植ではなく、「……言訳妻は聞いていず」なのである。へそくりといえは一豊の妻の昔から妻のものであった。あてがわれた世帯の中から、ひそかに生み出すものであった。少々

凡庸であつても一家の経済力は夫に属して、妻は僅にお台所の小遣いがまかされる程度に過ぎなかったからである。ところが敗戦後、サラリーマンなどの家庭経済では男と女の立場が逆転した。男はサラリーのすべてを妻の前に投げ出してお小遣い生活に甘んじ一家のやり繰算段を妻の手にゆだねるようになった。サラリーでは到底妻の要求のすべてに応じかねることを知った夫のズルサからの逃げ道に外ならなかった。しかし、それでは自由にビール一杯のめぬので働蜂としての夫が上つても素知らぬ顔で男のへそくりがはじまったのである。この句を読むと時代は遷るの感が深い。

〔一七四〕

機関車の入替え駅の日の
永し
(法泉子)

ボカ／＼と暖い春の日に、駅頭に立って、機関車の入替えを見ていると実にのどかである。切り離された機関車が「丁ど先へ——」そして又戻って来る。それから線路を替えて、ガチャーンと云う大きな音響と共に貨車に繋がれる。そんなことがいつまでも繰り返えされている。いつになつたら終るのか、はてしがないように日が永いと云うのである。

〔一七五〕
ひまだから床屋へ来れば
こゝもひま
(幽王)

店がいそがしすぎて困るが、ヒマなのも困る。不渡りの手形のこと、イヤな税吏の顔等々々、くだらぬことばかりが次から次へと頭にうかんで来る。看板の剥けたのが眼につく。塗り替えたらいことぐらいは判っているが、ヒマな時にたとえ少しでも経費をかけたくない。そんなことを考えていると、頭がムシヤクシヤして来る。いっそ散髪でもしてやろうと、床屋へ来たら、こゝもヒマで、扇風機だけが生ぬるい音を立てていたと云うのであろう。淋しい市井風景ではある。

アサヒビールは
あなたのビールです



朝日麦酒株式会社



らか台列後・耶路・大方・容千らか台てつ向列前
(影攝郎身素)氏諸の善一・日春・水谷・郎身素

こといよ敦倉

倉敷川柳大会

大会前記

路郎師をお迎えして

一
善

二十一日曇天―待望の路郎師を迎えての川柳大会を明日に控え天気がいさゝか気になる。今迄度々の打合せ会合おかげで今日の会場準

備はスムースに進む。十一時半若
千作業は残ったが午後にする事
にした。路郎師のお迎えに一同駅
に向う。十二時三十七分の急行
「つくし号」着、先生は单身元氣
なお姿でホームに立たれた。

駅を出られて千容氏方大氏を左
右に谷水氏春日氏私とは後に従
う。先生はれいの話術で面白く話
されながら歩を運ばれる。私もつ

い嬉しくなつて「嬉しさに師の影をふむ距離になり」の句が生れる。先生は時々立ちどまられ、旧家を見上げたり羽島焼のウインドをのぞかれたり、街のよさを語られる。倉敷に住む私達が倉敷の美点をおしえられた。街をゆっくり見ているとくつもりでおつかれとは思ひながらお歩き願つたが、先生も其の方をむしろ喜んで下さつた。和やかな雰囲氣の内に宿舎の「かき増旅館」に着く。午後のは会場準備は明日の事にして、小憩の後美術館、民芸館等にお供をする事にした。今度は度々逢いながらお話しする機会がなかったが初めて師の崇高なる人柄に接して私には意義深い一日であつた。

倉敷巡りへ

春
日

文化センターの入口にある古風な大原邸と倉敷川を隔て、萬の石垣に取囲まれたギリシヤ建築、これが有名な大原美術館で、こゝのすぐ近くの瀟灑な旅館「かき増」の一室で少憩にしては少々長い三時間余を先生と歓談し、柳談は勿論のこと先生の処世訓まで拝聴に及び一同感激したものである。先生のユーモアをまじえられたお話振りに失礼な申分だが、師弟と言うよりも親子とでも言い度い様な親しみを感じ、和やかな一ときを過すことが出来た。

愈々兼ねてから計画の先生を慰めする倉敷巡りへと千谷支部長

君も一行に加わり、美術館で開催中の「福島コレクション展」へ御案内申上げた。場内は所狭しとルオー・ピカソ、マチス等々泰西の名画に陶然としている人の群、お恥ずかしいことに皆目知識の無い自分の眼には子供の楽書位にしか映らない。

コレクションうちの坊ずの作に似て

けれど流石に先生は広範な御趣味の方だけに芸術探究の熱心さには一同敬服した次第である。一巡の裸後支開脇に突立つロダンの裸像と一緒に素身郎氏のカメラが一枚撮らして戴いた。果して佳作か没か出来上りが待たしい。次は二百メートル程東へ川沿に歩を進め、倉敷独特の倉造り建築の民芸館へ、こゝは郷土を中心に日本全土朝鮮琉球に及ぶ民芸品を集め我々に必要な日用品の中に素朴と健康美のあることを教えており、先生も御満足いただけたと確信している。先生はこの倉造り風景がお気に召されたく出品されている倉造り写真のネガを一枚求められた。同館前の「なかばし」橋上に川向うの考古館をバックとして、東宝映画「麦笛」ロケの行われた場所で素身郎カメラマン製作の記念撮影を終り一行は羽島焼へと急ぐ。

羽島焼の窯元へ

谷水

コレクシヨンの坊ずの
作に似て

美術館民芸館の見学も終り、路郎師、千谷支部長、方大氏は小型車に、一瞥、春日、素身郎と私の四名は宿舎で自転車を持帰、こゝから東南約一・五キロの地、羽島の繁場へ師のお疲れを案じながらペタルを踏む。約十分で繁場に着く。仕事場へ来ると、路郎先生は前からみに腰をかけてネンドをこねていられた。ネンドをこねながらの師のお話にも教えられることの多々あったことは柳人としてだけでないことに、深く考えさせられた。やがてお手作りの灰皿が出来上がり、俺に似よ俺に似るなの名句をキザされた。みんなで素焼の額皿に寄書もした。路郎師を囲んでのこのときは私にとって永久に忘れえぬであらう。

かくて前夜祭

千容

待望の川柳會歌友支部主催の川柳大会は、五月二十一日路郎先生を急行「つくし」で迎え、方大、一善、谷水、春日、素身郎等と共に、美術館、民衆館、民衆羽島の見学や、先生手ねりの陶芸も拝見するの光榮に浴し、あちこちの記念(素身郎)撮影にも御疲労の色なく同行の會員と打ち興じ、聊か老い込み気味の私に対しては、チャンスを逸せず、若返りの注射を打ち込んで下さる友愛の情に一再ならず感激したのであるが、之よりさき大会準備委員は兩三回の会合を有ち、初めての試みで先生を迎えるだけ

羽島焼の窯元へ

一谷水

に、万遺憾なきを期し、その張り切り方は特筆すべきで、前述に同行中向会場のことや遠来の柳友を案内する手筈について気を揉んでいるさまもほゞえましくやがて宿に落ちついて一風呂浴び、新に加わった斜木、方古、千代春、越島と共に先生をかこんでの前夜祭の幕は切って落された。

大会と我が家

—方大

妻「とうとう路郎先生をお迎えすることが出来ましたね。あなた嬉しいでしょう」

方「嬉しい、全く嬉しい」

妻「私、明日先生の御柳話を拝聴しに行つていゝかしら」

方「あゝ来給え是非来給え」

妻「ところで私、先生に直接お目にかけたいのですけれど、いけないかしら」

方「いかにいかに、それはいかに先生は御多忙なのだ。僅かな時間でも君がお邪魔することはいかに」

妻「でもこんな機会でないとお目にかゝれないし、あなたの先生なら私にとつても先生なのだから私お目にかゝります」

方「いかにと言つたらいかに」

妻「行きます」

方「いかに」

妻「行きます」

方「勝手にし給え」

翌朝私は大会準備のため心せ

く

ま、昨日のことを忘れてしまつて早々家を飛び出してしまひ、準備を終つてはとした処で昨日の事を思い出し、もしやと「かき増」に馳つけ裏口からそうと女中さんと呼び出し、僕の案内は来てやせんだらうか、とたずねると、おいでになつていますと言ふ、ぎくつとして先生は御迷惑していられるのではないかと恐る／＼お部屋の前までゆくと、先生と千容さんの話声と一段高い妻の笑声が僕の封建性をわらうように聞えて来た。

燦たり大会

日時・五月二十二日午前十時
場所・倉敷市本町観竜寺

田垣方大記

前日までどんよりと曇つていた空は二十二日の曉と同時にぬぐつたように晴れあがり申分のない大会日和になつた。昨日つくし号で倉敷に降り立たれた路郎師はいさゝかのお疲れの御様子もなく、今朝は潑刺たる元気なお姿で会場に臨席された。

会場に当られた観竜寺の客殿は南北の庭園の新緑に映えて廊下に溢れている人々の顔が新緑に染つてゐる。誕生したばかりの倉敷支部の大会としては予想外の盛況であり、県内は勿論遠く石川、大阪奈良、高知、鳥取より投句を賜り、とりわけ鳥取県からわざわざ川雅米子支部の三嶋美笑氏が出席されたのは当支部にとり感激の極

みである。大会は十時席題発表、十一時半席題メロ、風食休憩、午後一時再会当支部長木村千容氏の開会の挨拶に次いで、路郎師の柳話は明るい生活をするための川柳に就いて話され出席者に深い感銘

川柳人の夏姿

を涼しく美しくしたいと趣

味の川柳浴衣

を創りました

路郎主幹が自句を揮毫

別染品・男女共通湯上

りに好適・頒価八五〇

円送費六〇円御送金は

川柳雑誌社宛の事

を与えられた。その頃大阪の大方川柳会の松江梅里氏、川雅大原支部の本田恵三朗氏、高松の森紫苑莊氏、玉野市の渡辺あきら氏、西大寺市の北山椿吉氏より祝電祝報があり、それを読みあげると満場万雷の如き拍手である。

続いて席兼題の披露に移り固くらしい題のためあまり笑聲は起らなかったが先妻の披露（鉄児氏選）の時は俄然爆笑また爆笑で人間の弱点を顕した句には笑いが

からも深く反省させられる処があった。最後に路郎師の披露に移り羨望の三才は雄々、日満、まり子氏獲得、出席優先のためある短冊はまり子、美笑、春也三氏に渡り、これを受取られる瞬間の三氏の全く嬉しそうな顔は今でもまぶたに浮んでくる。全披露を終り採点係より総合十位を発表

一位一八点市長賞・小原宇柳氏（赤坂）二位一〇点市教育委員会委員長賞・前川禪一氏（児島）三位一〇点商工会議所会頭賞・三嶋美笑氏（米子）四位一〇点山陽新聞社倉敷支社長賞・服部十九平氏（岡山）五位一〇点倉敷新聞社長賞・齊藤正一氏（福山）六位九点川雅倉敷支部長賞・森分天風氏（倉敷）以下同賞・七位九点・大塚美能留氏（岡山）八位九点・永松東岸子氏（和氣）九位九点・菊地孝平氏（児島）十位八点・政田大介氏（赤坂）

の方々が緊張した面持で路郎師及千容氏よりそれぞれ賞状賞品を受取り、安原斜木氏の感謝の言葉と共に閉会の辞が述べられ目出度く意義深い第一回川柳大会の幕を閉じた。

尚本大会に女流作家十名（友榮まり子、清子、しの女、愁水、加志子、明心、風の子、多華子、あづさ）の出席は川柳都市倉敷を目標にしている我々にとつて力強い限りである。出席者七三名、投句七〇名、なお詳細は支部報

「川雅倉敷」に発表。次に路郎師選「真相」の三才を掲ぐ。

（人）下ッ端の方は真相知らず飲み（まり子）

（地）真相は陛下の叱咤まで伝え（日満）

（天）真相は手鍋さげたいマダムなり（雄々）

御礼

皆様ありがとうございました。県内外から温かい激励と御協力を賜り、あんな盛大な大会にしていただきまして支部員一同心から感激いたします。なお今後共宜敷く御支援の程伏してお願い申し上げます。倉敷支部会員一同



武田薬品

疲れをばし体力をつくる

武田の総合ビタミン剤

パンビタン

30錠・100錠 他に液・末・M・注



二人ツ切りで小な滝へ張るキャンブ
オートバイ靴屋の旦那とは見えず
寒かったなあと土筆が背のびする 倉敷市
意見より親父のぜん気にかゝり
カーネーション持って小遣きり来
叩き売美人のほうへ向き直り

同人町長に当選

合併へその円満を買われて出 岡山縣

柳人県議に当選

川柳の眼で県政を批判する
エプロンの白さ台所の暗さ
きりぎりすの様な唐手の師範台
水筒の水で妓は手を洗い 岡山縣
妻の留守どつかり部屋的心へ坐し
里へ来て姉妹やせた手を比べ
着飾って気胸に通うを羨まれ 貝塚市

お見舞が蛙の声をうれしがり
一張羅のねまきで患者散歩する
ミキサーは庶民に遠い音でまい 和歌山市
写真機は旅行がすぎな生れつき
メンスにも別れ白粉にも別れ
自嘲した笑いと気付いては呉れず 大阪府

シャンソンが流れ偽善の声甘し
さようならまでは笑顔で言えたのに
仕合せは親娘で泣ける日を送り 大阪府
上役の前ではみんな行きとどき
アパートがもうすぎる子の育ち
殺す気かと小児科で叱られる 大阪府

同 藤井 五茶

同 同 同

片山 百郎

同 同 同

大塚美能留

同 同 同

護川 梢月

同 同 同

秋月 宏方

同 同 同

藤村 梨花

同 同 同

伊藤 定美

同 同 同

竹内花代子

河蟹とおんなじように瓜を染め
ネヴァマインドの子供に限ては
ソフトクリーム上手に食べ 大阪府

同 同 同

盛場に孤独を捨てて来て孤独
セコンドの音が気になる不眠性
よろこばす気で写真もろといた 西宮市

同 同 同

ライバルの腹の太さを見てしまい
広告に明日のプランがまだ迷い
紙芝居では末っ娘も顔がきき 玉野市

同 同 同

上役にパイプの先で招かれる
金少し貯めて交わる友を選び
初めての旅に重たい守り札 今治市

同 同 同

先例にこだわって居る外務省
流行歌には素晴らしい記憶力
団体の旗は真面目に下戸が持ち 西宮市

同 同 同

梅干のコツを教えている日向
穴のあく程に見られて人違い
休日のおやぢの鋸に知る機嫌 天理市

同 同 同

虎刈でよし病床にはりつく身
芸なしでもてる芸妓の肉体美
オート三輪ぐらい平気な牛になり 愛媛縣

同 同 同

雑魚の骨抜きく長い酒になり
耐でよいとこだけ親子一致する
息で春のフアッション見て帰り 玉野市

同 同 同

昇給もすでに予算に組んであり
穀象よ米喰う虫に生れるな
花束を贈っただけの晴衣裳 大阪府

同 同 同

同

同

安井 久子

同 同 同

新井 酔子

同 同 同

迫田美婦道

同 同 同

長野 文庫

同 同 同

東浜 成詩

同 同 同

菱田 満秋

同 同 同

村上 旭童

同 同 同

南部 英夫

同 同 同

入口 富夫

かと思つたといわれているが思ふ
に足もとがフラフラなさっている
のではない。川柳としてそんなも
のではなくやり始めてからやらな
くてはおれないものになつてこそ
川柳人であり川柳のたのしさがあ
るのである。スランプということ
はあるが消えていくものだから止
めるでは少しおかしい。時事川柳
でなくとも一般の雑詠でも消えて
ゆくものは時事川柳より早く消え
ていくものもある筈である。川柳
人ならもつとつと時事川柳をつく
くらなくてはいけないのであるま
いか。路郎先生も時事川柳をつく
つておられる。水府氏も三太郎氏
もつくつておられる。新聞社から
頼まれたものがあつたとして
もお座なりではない筈である。時
事川柳に敗北すれば川柳家もお終
りではなからうか。これを征服し
てこそ生きる道はあるのである。
これはいろいろの人からもつと討
論されてもいいが結論は出ている
ような気がする。やるべしである。

消滅川柳に答 える

森本 藤司

時事川柳が消滅川柳であるとの
文郷氏のお説には全く同感、私自
身、時事川柳の九九％は消えゆく
川柳である事を意識して作句し、
投句もしているのである。

然し、残りの一％つまり百句中



鉢巻で要求をして角が立ち

長男出生

同

眼も開かぬ内から坊やあやされる

同

いとこへ来たという程酒がなし

同

視察官ばやいて刈った草を踏み

同

病室の中の散歩で胃を援け

同

三振の課長へわあっと女事務

同

教祖もう八卦の様な事を言い

同

経済誌読んで小金に苦勞をし

同

信心もして来衣裳も見て帰り

同

奈良旅行

同

大仏と同じ頭が前を行く

同

大鐘を撞く順番へ行儀よし

同

たよりない腕でヌードを撮りたり

同

苗代の青さが目立つ麦の熟れ

同

悲しみに遠く屋島が霞むなり

同

酔歩蹣跚エレベーターを踏みしめ

同

養殖の貝捲くように栗稼ぎ

同

療養の先輩いろ／＼智慧をつけ

同

かと云うて若葉だけでも物足らず

同

麦秋の往来釣師に邪魔がられ

同

浮かれとる横がボリスの詰所なり

同

紫雲丸沈没

同

嬉々として出でたる死出の旅衣

同

野球拳はだかにされて撮される

同

金のみが人生ならずと負け惜しみ

同

風流を好み小指の爪のばし

同

女工部屋バイブル忘れたように

同

加茂川の瀬音がかわる冬の三味

同

南国の夢がザボンの色に熟れ

同

退院に近く空気が甘くなり

同

無為無策一人占い凶と出る

同

二人目はほったらかしで優良児

同

予算こゝまでと工事ほっとかれ

同

野良犬と俺だけ深夜の交叉点

同

いゝ思案ある筈がなく草に寝る

同

子の丈に追われ服地の値に追われ

同

不幸中の幸は手術が適応し

同

パン食でする百姓を不思議がり

同

アクセクと葬式費用だけ残し

同

シーズン近し改札口の白ペンキ

同

叱られた時のまゝ畳はこげて居り

同

抜目なくサインを貰うエキストラ

同

彌次らせておいて候補は水を呑み

同

屋風呂で見える信託の広告欄

同

春祭ここはデフレの風でなし

同

保険屋を忙しそうにして帰し

同

診察を受ける気呑むなら今の内

同

岩風呂の妻大胆に月を賞め

同

病床の妻お花見へ行けと云う

同

年寄の幸福乳母車を押し

同

おばこでも何でも美人に見る来る

同

お見合の化粧仲間ちと直し

同

持田 勉

同

の兄を擗げた時にも増して……。

私は思う。時事川柳を愛するが

故に、疑問を抱き時事川柳を去ら

れた文郷氏こそ、時事川柳を育成

する資格の具備した立派な川柳家

というべきであり、百％の中の消

えない一％を作句し得る時事川柳

の一人者であると信じたい。文郷

氏よ、今一度説き時事川柳に帰っ

て頂き度い。運命の落し児は、慈

父、文郷氏の帰宅を日夜神に祈っ

て居る。

或る日の会話

藤村 梨花

「そんなら三時に行く事にしよ

う」

「OK。そやけど、ちよっと遅

れるかもわかれへん」

「何分くらい？」

「何分云う程も遅れへんけど

な」

「そんなら、かめへん待ってて

る？」

「ど位の位やったら待って呉れ

る？」

「そやな」

「二〇秒位か？」

「そんな事あらへん」

「三〇秒位か？」

「ううん、そやけど一分はあか

んで」

「五〇秒は？」

「待ったるわ」

「六〇秒は」

「待ってたる」

18143 223
4400.16



鮑魚とほいしとさきさき

札束に呼吸の止まる程抱かれ
偽軸を買って風流人になり 鳥根 隆
舞扇男嫌いに見えぬ姿態 同
踊りましようよなどとワルツ掛け 和歌山 隆
正助の様なくらしで利子を取り 同
大仏のように無趣味な父が居り 大阪 市
洋裁へ昔坐ったまゝで断ち 同
あま臭い牛の息春の田を耕す 倉敷 市

春耕

鳶の笛真似て鋏杖たて直し
無いものを無いと云うの云い洩り 大田 市
湯を賞めて風邪を引いてゝ湯に入ら 高田 市
母の日へ四十の胸へ赤い花 松江 市
気休めと知ってる注射して貰い
妻の目が食い入る様に飾り窓 岡山 市
おわい屋も鼻唄で来る春霞 同
上敷を敷いてすきやき出るらしい 滋賀 県
僕の住む家の普請の鮑魚 同
御不満はなどない気できこ見る 金澤 市
嬉しさが言葉に出来ぬ勝力士 同
アパートはみんな勤めのある出口 金澤 市
連休へ妻同伴を弾いて見 同
キス一つせぬ間に使い込みがばれ 岡山 市
先生と呼ぶ新劇の座長さん 同
養老院嫁をいぢめたとは言わず 貝塚 市
古寺の如来を拜むハイキング 同
マドロスの掟のように船と死に 貝塚 市

同 景山 綾美
同 木下 一休
同 西本 保夫
同 米 豊年
同 岩垣日本村
同 橋本白郷子
同 熊見地久平
同 土守トン坊
同 山田 凌甲
同 竹森 充六
同 春名 秋芳
同 堀井 一峰
同 小島ささず

三行へあやまち許す父となり
お守りを縫いつけられて旅に出る 高知 市
踊れない男グラスを離さない
雑草と片付けられる中に居り 大阪 市
ポツタム宣言以来十年伸びぬ腰
仲人した数だけで足る村議選 山口 県
方言も入れてガイドは楽しませ
鯉のぼり本家分家の大きさに 岡山 県
幸福をストップさせたレントゲン
親類のながい淋しい町議戦 岡山 県
立候補したが笑われ取り下げる
日本のもうさ緑の羽根を売り 鳥根 隆
課長ともなればでっかい認印
なんとまあ貸した弱身と云う時世 大阪 市
春眠を体温計に起される
三等の方へは新聞売りに来ず 大阪 市
わがくらし楽にならず爪も伸びと
片想いと悟ってからのひげが伸び 岡山 県
無駄のない家に明るい灯がともり
緑の週間俺は木を伐る職に生き 岡山 県
子供三人遺産であつた寡婦となり
ビヤホール飲み足し目が探り合 貝塚 市
不景気になって合理化などい
信仰をすゝめて友も少し病み 岡山 市
子の理想明治の父と喰違ひ
敬老会孝行らしい嫁ばかり 新居 濱市
灰皿もお代りをする長話 同

同 有友 玲羊
同 谷野 泰平
同 安平次弘道
同 小野花団子
同 亀井 星浦
同 木村 俊昭
同 植松弘一郎
同 池田 正斗
同 坂手 有子
同 佐々部満佐志
同 阿部かつみ
同 森金 一太
同 加藤 向水

「ふーんそんなら行くわさようなら」
五月の風はあくまでも美しい。
五月の木蔭も美しい。男の子達は立ちさつた。真に平和である。

長野文庫

香川県に「平沢ゆずらん」と云う川柳家が居る。「ゆずらん」は「譲らぬ」に通じるので相当頑固な人かも知れないと想像して居たが、会って見ると態度も音声も女性的で謙虚な好感の持てる紳士だったので意外に思った。豊中市に「ゆずる」と云う方が居られるが、この両方の雅号を思い浮べる度にほゝえましくなる。ところで他人の名前に氣を使う必要も無いが、私が文庫と云うのだから「文」のつく川柳人はどの位居るだろうかと雑誌を二、三冊繰って見た処、文久氏を初め文蝶、文月、文郷、文夫、文秋、文化、文平、文也、文糖、文明、文子氏など十余名の人が居る。又下に文のつく人では享文、義文、豊文氏等が居るが、この文々はどうやら本名らしい。更に中に文のつく人では左文字、十文字氏が居た。昔半文銭、六文銭氏が居たが現在一文銭氏と小文吾氏が変つて居る方であらう。名は体を現わすとも云うが前記ゆずらん氏の様に名が体を現わさぬ場合が多い。大森風来子氏など今春松山でお目にかゝる迄は飄



気まぐれで恋のとりこになる男 岡山縣
 三輪車乗り捨てゝいるすべり台
 蛹から這い出た自由知るギブス 岡山縣
 小遣を置いたら父は要がなし
 忘れさす無沙汰と知らぬ故郷の妻 岡山縣
 つぎに咲かす処女舎のスカート 大府府
 粗品進呈広告マツチ呉れただけ
 雨入る長靴だけど履いて出る
 葉桜は悲しけむしにだけすかれ 岡山縣
 參觀のコースが鐘も撞いて去に
 チャンバーの裏をかえと二枚に着 岡山縣
 落伍する筈水筒はいつか空ら
 靴下を上げる娘と目が出合い 岡山縣
 おくてですと白痴の子に甘い
 若人の恋愛みつ大を連れ 大阪府
 あれを買ひこれを買ひとて小 幸
 初七日が済んで借金取りが来る 玉野市
 インテリあつさり脳溢血で死に
 不渡りにしてKKの運動会 奈良縣
 運動会していますの社旗をたて
 已むを得ぬ義理の請判薄く押す 愛媛縣
 趣味のないお客で酒を急ぐなり

母還暦

同 藤田 美雪
 同 松島 不在
 同 大石 一久
 同 林 冗歩
 同 清水 秋夫
 同 野田 太郎
 同 鶴見 松太
 同 永田都詩子
 同 星川 陽石
 同 平井 良児
 同 鳥井 川鳥
 同 北村 三歩
 同 石原 文郎
 同

ストップの旅行へ死んでいゝ 堀ね 出雲市
 後始末待てず総裁椅子を去る
 パトロール置き去りの子がすがり 倉敷市
 テンエージャー化粧の腕は買 倉敷市
 ほとけさんですと 押搦しよう 安来市
 倦怠期ですとは子のない逃げ口上
 風かおる青葉の候かと寝をべつて 大府府
 新婚へ宿の女中は気を利かし 大府府
 お上りに誘われシネラマ見ると 大府府
 吾が子ならそのいたすに期待 倉敷市
 蚊帳買えぬ家も西瓜に蚊帳を張り 岡山縣
 素人の浮子は度々上げられる 米子市
 地図にない駅へ栄転祝われる 倉敷市
 気楽さを地主の方から羨まれ 岡山縣
 ビニールの中で西瓜は目をさまし 岡山縣
 島の灯が波にくだける退院日 岡山縣
 鼻糞のような恩義を鼻にかけ 岡山縣
 面影は夜汽車の窓に淋し過ぎ 大阪府
 療養に来てまで唄う労働歌 岡山縣
 泣くまいと女の意地の紅を塗り 大阪府
 遠のいた見舞にベッドの花は枯れ 岡山縣
 へそくりで百万円の夢を持ち 大阪府
 失業のやけ酒妻も黙って居 熊本府
 ダイヤルを浪曲に変えるよい娘 大阪府
 進む世に胃痛なおせぬ世をのろい 大阪府
 真つ直ぐに帰れぬネオンつき始め 河内市
 アパートの窓に小さな鯉のぼり 大阪府

同 佐藤 泰之
 同 篠井しの女
 同 遠藤奈々丸
 同 児島与呂志
 同 神田 秀峯
 同 三木 檜林
 同 角田 卯月
 同 阿部 四郎
 同 福代天邪鬼
 同 篠井 泥魚
 同 山田ゆき江
 同 浜口志賀夫
 同 及川 南洋
 同 田中 明
 同 石本 一子
 同 舞島 白郎
 同 橋本みどり
 同 宮田 竹坊
 同 清水 和夫
 同 下岳 周村
 同 岡島 孤舟
 同 丹波 太路
 同 森本黒天子
 同 西村 雀水

々乎としたやせ形の長身の姿を想像して居た処、まことに堂々とした方であつたし、高麗亜鈍氏なんかもキメの細い詩人的感觸のする人で活字から受ける雅号とは凡そかけ離れて居る。小松山と云う大形力士が居たが、今幕内で一番軽量なのが鬼竜川だと云う、この力士など名乗りは仲々大ききうに見える。
 時々誌上で見かけるが、A.T.公黒ん坊、ボン太郎、トン坊、兵六凡八、すつとん狂等の諸氏の名を見る度にこの方々は「名刺など刷る場合困るだらうなあ」と他人事ながら心配して上げる次第です。「子」のつく雅号でも樂天子とか凡々子、行々子、東岸子、素天子重陽子氏などは男性と分るが「振津子」は「せつ子」さんかと思うし「満洲子」は「ます子」さんかと思う。松山の靈子さんも漢字かローマ字で書けばよいが「れい子」など書いたら女の人と勘違いされるだらう。元甲南高校の校長に前波仲尾と云う人が居られた。その息子さんは「前波伸子（なかのこ）」と云う偉丈夫だが、その人が「女性宝鑑」と云う女子用百科辞典の本を著して居るが、著書名と著者の名前から伸子氏は女子と思われて居る。
 私はかつて「豆」と云うあだ名がついて居たことがある。これは妹が小さくて小粒だからと云う理由だが、豆のつく人もよく氣につく。つまり豆萩氏など何となく



父さんでよかった植木鉢が割れ 神戸市
生き馬の目を抜く街にまだ荒地 大坂市
新入社特技になかった踊り振り 米子市
自転車も人も寝ている春の土堤 貝塚市
耕転機隣の牛をいらだかせ 神戸市
安来節本場仕込みの訛入れ 堺市
留守居する祖母にも并当つめて 岡山縣
晩学の英語眼鏡の度が進み 貝塚市
原水爆反対署名するベッド 貝塚市
連休のしわ寄せが来た膳になり 金澤市
ビヤホール淑女も痛飲してござり 貝塚市
胸の上で豌豆剥いてもう正午だ 貝塚市
金魚鉢病む子の傍へ置いてやり 岡山縣
茶化したをまともに受けて妬む 貝塚市
むつきまで胸へ突上げ抱いて来る 京都府
貸衣裳しばし忘れる三々九度 大坂市
入れ歯する金さえ惜しい程残し 岡山縣
水筒は水筒なりと下戸信じ 岡山縣
隣室の派手な三味線聞いて飲み 石川縣
神経質だと看護婦とり合わず 安来市
農繁期すむのを売出し待って居り 山口縣
代償はトッブモードに身をつつみ 熊本縣
甘く見た移民の夢に來てたまげ 今治市
決算期どこの机もひげがのび 廣島縣
恋文が確かに届いた女の眼 西宮市
大臣と漫談出来る汽車になり 大坂市
父のない子へ就職の門狭し 宇都市

飯尾寄与史
川口 秋香
湯原 一机
平山 潜雨
小泉沙智子
渡辺 紫茶
菅田 真
鈴木 鈴彦
杉本 一鶴
松永 恆青
河楊 梵鐘
小田 柳叟
小田 紫草
安永美美子
楠 光二良
西岡 洛醉
西山 晴々
中田 野川
中松 一恒
遠藤魔砂夫
田中 秋穂
西村 昭人
池内 好日
山田 翠陽
徳永 貴美
中野不二夫
岩原 滔川

新婚の旅は重ねて切る切符 廣島縣
人間の弱さは夢を信じる日 今治市
プラスにもならぬ嫉妬が疲れさせ 岡山縣
合服が出来れば見合断られ 岡山縣
赤い爪カクテルグラス持つ指の 岡山縣
家出よりましかと療養所へ送り 天理市
こんな良い娘がいたなら老けて行き 倉敷市
壁一重隣のヒスに碎易し 岡山縣
行楽のブランへ損な役がつき 出雲市
おしっこがしたかつたばかりの途中下車 堺市
パレリーナーの裸像となつた光消え 宇都市
母の日と云われるくらし待ちどし 大坂市
太っ腹短気な人と競り合わず 神戸市
亡くなった兄を柱のキズに見る 尼崎市
言い負けた口惜しさパイプの手がふる 岡山縣
母の日に子らの感謝にちとてれる 尼崎市
灼熱の恋ふるさとを落ちんとす 京都府
薄給の長男結婚予算たて 尼崎市
指切りでやっとなだめたつらい嘘 西宮市
広告と知らず御札をいんぎんに 笠岡市
広きがままに青きがままに海悲し 守口市
メーデーの何処までつづくぬかるみ 豊中市
勤めの子家を下宿の様に住み 宇治市
失恋は花の淋しさに惹かれ 岡山縣
私服着て勤務もしたいナースです 兵庫縣
宣伝カー午後の安静に容赦なく 兵庫縣
首を洗つ社長をの帰社を待つて居り 倉敷市

山田すみ子
越智 一水
宗森とも子
池田 文女
佐藤竜山坊
坂本 貴通
野田 一念
小林 鳴子
三吉 美好
辻 圭水
上林 粗影
伊藤 光二
西田 幸
山本くに子
田口 紫陽
林 澄子
竹松 九角
中屋 すず
奥村 善坊
佐内 隆文
中井 泊月
水野 水茶
柿本 古竹
小田 紫草
高見 薫
西川 与一
小野 広志

つかしきを感じるのです。尤もこれは同氏の句調が好きなる点もある。先日放送局へ行つたら「貴方は全く川柳人だ」と云うので、その訳を尋ねたところ「川柳が小粒文学だし貴方は小粒だ、川柳が皮肉文学だし貴方は皮肉家だ。川柳が寸鉄殺人的だが、貴方の選評も鋭い」と云われたので「私の小粒以外は全部考え違ひです」と云つておいた。

金沢より

安川久留美

私はアパートに住む女優の三枚目というのを作つて、川柳遊戯なる事を微苦笑した。然し課題吟でも「アパートの猫境界を軽んずる」はいさゝか自信ありだ。下五の表現が一寸ボレする句だ。

路郎夫人よしのさんの句集「福寿草」が出るそう。暑いのにこの題名は女史の代表名吟から來てゐるのである。この他に私がいま一寸思ひ浮ぶ句は、夫君路郎さんに酒をのませたくあり、又吞ませたくないというムジヤン恋の句と「貯金箱またひき潮となりはじめ」の句である。夫人については一しよに酒をのんだことや、いろ／＼の昔はあるが、ここに一つ書きたいのは金沢の草分けファイル誌に女史の初対面印象を「岡田八千代」女史のようだとかいた。とに角、福寿草をとわに若い女流柳人がなつかしきを抱くようにしたいものである。



武部若菜さんを

訪ねて

(女流作家訪問記5)

丸尾潮花

「どうぞお手やわらかにお願いします」

これが私への若菜さんの第一声である。

「若菜さんは川柳をいつ頃から始めになりましたか」

との問に対して

「兄が川柳家なので若い頃から作っていました、本当に作る気になったのは主人(香林氏)が作り出した頃からです。昭和十二年頃でしょうか」

「どんな時に多く句が作れますか」

「それは静かな時ですが、掃除をしながらでも句が出来る時があります」

「御自分でどの様な句が作りたいとお思いになりますか」

「詩的なもので、しかも川柳の要素を備えた句や、名人芸などを句にして見たらと考えることもあり、最近生活句に成り勝ちですが、主人が貧乏臭い作品を嫌いで、でも私などはどうしてしても生活中心の句になり勝ちです。つとめてそんな句はふいたり作

らないことにしていますが」

と笑いながら話される。

「最近の女流作家の作品をどの様にお考えになりますか」

「さあ私など皆様の句を批判する様な事は出来ませんが、皆さんとてもお上手だと思つて見せて頂いています。特に好きだと言う方

はありますが、私には太田良子さんや花代子さんの句に関心を持ちます。と申しますのは矢張り世帯人だからなのでしょう。若い方の句は感心はしていますが、歳の差と申しますのか、環境のへだたりから来るのか甘い恋の句などは出来ません。まして、私などには若い方の句と言うものは夢の様に遠い物の様に思えます。花代子さんの句を見ていますと、御主人を主として作句された句が多い様に見受けられます。たとえば、

(かきばつてゆくは貴男の交際費) (全快をすれば家には居て呉れず) と言う風にね。お寂しいのでしょう。花潮さんもお忙しいのでしょうが出来るだけお家に居てあげて下さいませ」とときついお小言を頂戴する。

「私などは川柳のためには家庭生活を或る程度犠牲にしています。と申しますのは私達は川柳によつて救われて来たのです。主人は矢張り毎日外に出ているものですから色々うるさい事が有ると思います。夜分宅に戻りましても、とても気のふさいで居るように見受けられる日があります。そうした時私はつとめて川柳に話題を持つ様になつて居ります。川柳の話になりますと、とても明るい顔になつて呉れるのです。若し私達に川柳が無かつたら、終戦後の色々な問題にぶつかりましても救われなかつたでしょう。ですからどんな事が有りましたも川柳の集りだけは出席して貰う様に私からすすめて居ります」

「鮎美さんの申される川柳合掌ですね」

「川柳を作句致しますにも女性性は男性と違ひまして、視野も狭く、歳をとりますとセンスも古くなりますのでつとめて勉強する様にいたして居ります。私には主人を詠んだ句は有りませんが作るこ

とが嫌いでもないのです」

「香林さんの句には奥さんの内助を詠まれた句が有りましたね。(知らぬにはあらず内助へ頼みかむり)の如くね。去年の本社句会の皆勤賞も奥さんのお蔭だと言つて喜んでいられた。放つて置けない程奥さんの重体の時にどうしても会に行つて呉れる様と奥さんが病床からお褒めになられたつてね。そうした奥さんの愛情が(暖き込めば起きていたのか灯がともり)と言う香林さんの句になつて現れたのです。羨しいですね。香林さんと御結婚なさいますと幾年になるのでしょうか」

「結婚をしましたのはたしか昭和十年でしたと思ひます」

「その当時の思ひ出を一寸話して頂けませんか」

「そうですね」と笑いながらつぐぐと過ぎ去つた日の思ひ出を追想されているようであつたが、

「今はもう人生の春秋を何十度も重ねて来ましたが私共は冬枯れの境地です。しかし川柳で思ひます情熱を歌つて見たらと思つてます」

「女流作家訪問記の御感想は」

「大変結構だと思つています。川維でお逢ひ出来ない女流作家の方が沢山居られますが、毎月雑誌を通して大体その作家がわかる様な気が致します。ひさみさんなども句を通して、より深く知る事が出来ました。ひさみさんの様に御主人を亡くされては、物質的な問題は別と致しまして他の面でもとお淋しいものがある様に思ひます。男性の方には出来る辛抱も出来ない時があるものです。そうした事を思ひ合せますとお気の毒な様な気がしています。良子さんはお元気でしょうか。定美さんはどうしていられるのか、などよく思ひ出します。今年は久し振りに良子さんの句を川柳塔で見せて戴きました、とても嬉しいと思ひました」

「最近の川維でお好きな句は」

「春菜さんの文五郎さんを詠まれた句です。(文五郎お園に恋の吐息させ)と言うのが川柳塔に出ているのを見て頂きまして驚きました。私も文楽に参りまして文五郎のお園を見まして、あゝした名人芸の句が作りたいと思ひましたが、とても作れず苦しみましたのに春菜さんがあんなにうまく作つていられるのを拝見しまして嬉しくなりました。お正月の賀状に千石庄の方から頂きました句に、(祝箸妻のきれいな手で届き)の一句に深く胸を打たれました。たしか耕平さんの句だつたと思ひます」と云われて書ききの賀状を出して来られた

「話は変わりますが百貨店などへお出かけになりますか」

「いいえ、体が弱いものですからちつとも外出は致しません。交際も下手ですし風間は主人も留守なので、あられもない恰好で最近美容体操をして居りますが健康にもいい様に思ひます。伴奏は嫌いですけれど」と少々恥かしそうに話された。



飛燕往來

★福田山雨樹氏（横浜市）より

— 諸君宛 —

投句がおくられて申訳ありません。実はこのところ不調つゞきで日夜息苦しさになやまされております。セキも苦しくタンがおびただしく出ます。食事の方はどうかたべておりますが妻に口まではこんでもらっています。マイシンは先月まで十本打ちました（累計七十本）が効かなくなりました。それで今月からヒドラジッドとパスをのんでおります。よく信仰をすすめられるのですがどうもその氣になれません、と云って無念無想の境地にも入れず弱ります。

（三〇・五・二七）

★浜野奇真氏（岡山県）より

— 諸君宛 —

近頃の政治にも似た梅雨の空
川維六月号巻頭の「スランプ」
に關する先生のお言葉に思い當る

所が多く大変有り難く読ませて頂きました。こゝ二三ヶ月全く作句出来ずに困って居た所でした。おゝいに仕入れに務め新しい道を切り拓きたいと思つて居ります。

私の近所でこゝ数ヶ月前から川柳を研究したいからの申入れが有り「北風グループ」と名づけて最近句会を持って居ります。弓削支部と同一の町内ですが何分へんびな所で直接の指導を他の方にお願いする事も出来ずスランプの真只中に有る私が止むを得ず中心になつて研究して参りました（途中一回鉄児、牛歩両氏に御足勞願しました）しかし皆熱心です。

特に小部落で有りますが、いわゆる夫婦、親子組が非常に多く、三十名近くの人が会には参加します。家数にすると十二三軒のものでしょうが、しかも毎回新しい組がふえて来るのは私にとって全く嬉しい事です。

又五月二十八日には、斗病生活中の私の同窓生 森玲童君を久米郡西川病院に慰問方々同病院の川柳人の方々（患者さん看護婦さんお医者さん）とひざを交えて句会を持ち一泊、翌日、一日川柳談議を致しました、弓削支部から短冊を少々慰問品として贈りましたが大変喜ばれました。

恒例の西日本大会も間近に迫つて参りました。鉄児氏も準備に中々はりきつて居られます。今後の御指導宜敷く御願ひ申し上げます。

末筆乍ら先生を初め皆様の御健勝を御祈り申し上げます。敬具
六月十六日

★阪田良坊氏（下関市）より

— 諸君宛 —

宮島にて

昨三日（六月）の病院長会議に引つゞき結核対策委員会に出席しました。ここ宮島対岸の宮島鉄道会館の四日の朝です。波静かな内海と目にしむ様な青いもみぢにいよ／＼夏らしさを増して行きつゝあり、やがて海水浴が出来る日が一日と近く夏らしさがただいます。窓への句は「昨日下関から投函して置きましたから御入手のことと存じますが念のためお報せ申します。」

社の黒板

★川維高知支部新設

中沢濁水氏が亡くなられてから、高知支部が久しく中絶されていたが、五月から高知市追手筋五七に川維高知支部を新設することになった。大西迷窓氏が支部長となり支部句報第一号を出した。

★各地で川維支部新設を希望されるむきが多いので、最近新に支部規則を印刷した。規則御入用の方は支部創設係宛に申込まれたい（要八円切手）

★バックナンバーの欲しい方は往復ハガキで在庫の有無を問合せられたい。

柳身の上相談

豆秋生

（問）私の夫は近頃川柳の句会だと言つてはよく家をあげ夜更けて帰ることが多く、いざこざが絶えませんが、決して疑がったり妬いたりするわけではありませんが、どうしたらいいでしょうか。（悩める若妻）

（答）句会日は誌上で発表して居り、又案内状も差し上げて居りますから大いごまかせないわけですし、遅くともみおつくしの鐘が鳴るまでには帰宅される筈です。それよりはこの際奥さんも御主人の川柳趣味に同調せられてはいかゞでしょうか、そうすることによってお互の御理解を得ると共に家庭の雰囲気もよくなるので大変いいのですが……御夫婦で川柳句会へ出席なさっている円満なお姿はまことに美しいですよ。

（問）私は酒を呑みながらでないとい句も作れぬような癖がつき困っている勤労者ですが何かいい方法はないものでしょうか。（中毒患者）

（答）むかしはあなたのようにだらしないデカダン作家がチョイ／＼あつたようでは決して作れない。タマのお酒ならば句境が飛躍していいものですが、あなたは既にお酒と川柳の中毒に罹つて職務までがおおざりになっていられる。「うんと働いて下さい」「一生懸命旋盤にかかりついで十五分間位な休憩時間に生きた職域川柳を作つて楽しんで居られる工員さんも御座います。真面目な一日の勤勞を終えての晩酌の時間にしたら必ず佳句が生れる筈です。」

ビゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識！

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でビゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！

アストリンゼン

桃谷順天館

小児科

平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

柳・界・展・望

▼川維の年中行事として多大の人氣を呼んでいる本社川維川柳まつりは、七月十日(日)午後一時から光明寺で別稿通り句会の外、不朽洞会前理事長中島生々庵博士に記念品贈呈並に新調の川柳浴衣による川柳おどり、出席者に、記念品、有志懇親宴等多彩な計画で開催されたい。多数来会されたい。なお、各支部又川維系各会でも全国一斉に此の吉日をトシ同一特別課題で優勝種、

路郎賞競争争奪が行われる。

▼南区医師会文化部(大阪市)の川柳部、南画部、茶道部合流の懇親会、(当番川柳部)は六月十九日朝九時日本橋北詰集合、京都御室仁和寺見学、同寺会場の文人展、橋本関雪郎拝見、大徳寺の茶会等開催▼既報川維淀川支部主催苔寺吟行は、路郎師、葭乃女史を招じ六月五日決行、香林氏の案内で松尾神社、苔寺参観、地蔵院で路郎師の柳話「川柳と人生」があり、後句庭、家族連れの楽しい一日の清遊句会を催された▼大阪通信病院川柳会は六月十八日午後二時から五階の講堂で開催▼南海電鉄川柳句会は六月二十日午後六時から粉浜親和寮で開催▼南区医師会文化部杏林川柳会は六月二十六日午後三時から八尾市の太希志居

で開催▼川維婦人友の会は六月二十六日午前十一時から東高等学校で開催▼川維川柳まつり打合会を六月三日午後六時から本社に開会、潮花、紫香、豆秋、梅里、摩太郎の諸氏参集▼川維阿倍野支部(大阪市)七月句会は十四日午後五時から大阪市阿倍野区松崎町二西光寺で、故大西野介三回忌追善川柳句会を開催。多数参詣されたい。

▼既報鳥ヶ辻川柳青葉吟行会は五月二十九日京都銀閣寺見学を兼ね、京都鹿ヶ谷寮で句会開催以上何れも路郎主幹出席▼堺川柳人グループ主催恒例の堺魚夜市川柳大会は七月三十一日午後六時から堺市英彰小学校で開催、出席者は川柳会後夜市場に特別入場を許される。▼川維堺支部句会は十四日午後六時から摩太郎居で六月句会開催。なお前回の第五回堺市杯は伊藤光陰氏獲得▼川維倉敷支部句会は六月十二日南中学校で開催。▼3・3・3川柳会(堺市)は六月四日午後五時半から島野工業株式会社会議室で六月句会開催本社から梨里編集長出席▼みをつくし川柳会(大阪市)は六月十四日午後六時から凡九郎居で開催▼鼓川柳会(大阪市)は六月十二日午後一時大阪スケートリンク観衆席で開催▼川柳備前支部(岡山県)句会は六月四日午後六時久米雄居で開催▼川維弓削支部(岡山県)は六月四日金光教会所で開催▼川維岡山市内グループは五月二十三日午後六時風来子居で開催。▼岡山

質疑に答える。

初心者のために川柳第二教室を設け、句作に関する研究を続けておりますが大変好評なので、更に第二教室を拡げて、川柳に関するいろ／＼な質問や相談に応ずることとした。担当は清水白柳子氏。

質問は川柳に関する限りどんなことでもよろしいが、一度答えたいことは答えたい。調査を要する様な問題はお答えが多少遅れることを予め御承知お願ひいたす。「質疑に答える」は大阪市天王寺区宰相山町一四七清水白柳子氏宛

雑池田支部(大阪市)六月句会開催、阪急川柳会と共催で二十一日午後五時半から阪急電鉄本社地下食堂で開催▼川維玉造支部(大阪市)六月句会開催、六月一日夜八時から白柳子居で開催▼大阪市交通局川柳会五月例会は、十八日午後五時から同局サロームで渡辺孫拙氏追悼句会開催▼川維米支部句会開催は六月十二日川柳会館で開催

された▼川維下関支部句会開催は六月十二日下関駅会議室で開催、なお同日、七月十日の川柳祭に就て相談会があったと▼玉野市文化祭川柳大会が六月五日鳴滝別荘で開催された▼笠岡市公民館(岡山県)では川柳並木会員で山陽川柳に入選した句を額縁に入れ駅頭に掲出すると▼前田俊郎氏(東京都)は日本経済新聞(五月十九日号)に「川柳四十年」を執筆された▼坂下也素氏(東京都)は五月十四日逝去。謹悼。氏は東京都衛生功労者▼大井正夫氏(姫路市)は五月二十五日岐阜市に東野大八氏を訪問された由。▼岩川寛虚氏(愛知県)は退院後、愛知県半田市字知果)は松屋に移られた▼鎌田たかし氏(堺市)は堺市松屋通り三丁大セル白百合寮に転居。

▼田中野狐禅氏(東北川柳同人)は兼て白河厚生病院に入院加療中のところ薬石効なく三月一日午前五時四十五分に永眠された。謹悼。▼尾藤三笠氏(東京都)が五月三十日午前三時に亡くなられた。もと柳友会の参与、戦後はきやり吟社の客員、行年四十九才。謹悼。(摩)

初代 句碑再建の賛助金 川柳に就て

既報の初代川柳の句碑再建の賛助金(一口百円幾口でも)は事務のハナサと間違等を少なくするためなるべく東京都台東区北福衛町四三台東区役所内句碑再建委員会宛に御送金を願うこととし、句会等で特別に取次を依頼されたもののみを弊社で取扱うようにしていたが、それも七月末で打ち切り同委員会へ引渡すことになったのでまだ御送金になっていない方は申込まれた。それ以後は直接送金願ひます。各地の支部でも送金の次手にお送りになれば取次ぐがこれ又直接の方がお互に手数がかからないのよいと思ふ。地方在住の方で他社の人からすすめられたので本社と両方へ出そうと云う話を聞いたが、どうせ一本になるのであるから他社であつてもその方へお願いする方が便利ならそれでよいと思ふ。何れにしても浄財による御賛助を重ねてお願いする。(麻生路郎)

O.S.K

のレディメイド

株式 大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目

電話東(四)一七四五番



川柳第二教室

象徴と具体(研究題「青」)

戸田古方

「青」から感じるものは「若さ」とか「のびやかさ」とか「希望」とかいういふ方と「青葉に塩」とか「青くなつた」というようなかんばしくない方とがありま

す。「青」の題を通してこういっ

たものを表わそうとするのです。感じ一方で進むとひとりよがりになりかねないのですが、さすが川

柳人は「青」に關係のある考えられる全てのものを次のように引

ぱり出しています

青い樹、青い空、青い麦、青畳

青信号と人生、青い頭―散髪―

尼、青道心、心配顔、病気の青い

顔、酔った青い顔、青漢、青野菜

青い海、青鉛筆、青二才、青い眼

青筋、青淵、青草、青絵具、青い

湖、青い鳥、草餅、青信号、青葉

青い恋、青息、青い雨、青果、青

票、青色申告、青い煙、二等車、

珪藻、青い背広、青梅

緑と青と混同したものもないで

はありますが、よくも思いつい

たものだと思心させられます。

青畳子等窮屈な日が続く

雄声

新しい程よいといわれる青畳も

上敷をして遊びなさいといふ出

されては子供心に青畳を恨む心

がないとはいへません。常識を裏

えしにして、かえって真理に近づ

のはうずな海の広さ、青さ、たしかに青の象徴を適格にとらえた一句、海をながめていきますと神経衰弱も近視も癒ってしまうと申しま

す。

うすい空濃い青海の水平線

豊年

色の濃い淡いがつかいわけられて

いるのが面白いと思ひました。

青空へ詩人農夫の手が休み

保夫

詩人農夫がこつんと来ました。

「シジンノウフ」とよむか又外によめ

るかもしれませんがどうよんでみ

ても具合がわるい。詩人としての

農夫という意味でしょうが、詩人

も概念なら農夫も概念で「詩人の

歎」とか「農夫の詩想」とかいえ

ぬものでしょうか。

青空にガラスを拭けと教えら

れ

天地にふみがえる五月の自然の中

にボツンとりのこされた自分の

ヅボラ心をたまたまガラスの曇に

見つけ出しました。正に自然は人

を浄化し、川柳は人生を陶冶しま

す。

青空に風も無く鯉屋休み

雪山

「屋休み」は幼いですね。一夜さ

んの句「風やんで青葉の鯉が尾を

休め」と比べて頂きたい。

空の青しはし絵具とみくらべ

正斗

千金の絵具をつかつてもあの空の

青さは求むべくもない、順応すべ

きもので征服すべきものでない自然の前にしみじみ頭が下ります。淡く青く人焼く煙空に消え

修

人を焼く煙だつてそう簡単に消え

るとは限りません。「煙だけ見れ

ば火葬場とは見えす」という句も

あります。もつともこれは大都会

の繁昌している火葬場のことで

が、人を焼くんだから人生のはか

なさ結び合せて淡いものときめ

られたのでなければ幸です。

腹に虫沢山飼うて青い顔

春也

率直な句です、川柳なればこそ許

される率直さ、正直さなんでしょう。

そうでなければこんなばち

い句は人が見むきもしないでしょ

う。醜ければ醜いだけ人生の真実

の断面でしょうから。

真つ青になって婦長がまた叱

り

何をしたのか、人の命をあずかる

看護婦さんの元締、叱つただけで

ことがすめば幸いというものの、年

配の経験者が相当大胆さもあるはず

でもそこは女性、この「真つ

青」は自然です。

青梅にソーッと歯型をつけて

みる

「ソーッと」との片仮名がいかにも

句主の女性をよくあらわしている

美しいことか。中毒のことなど忘

れて川柳美にひたりましよう。

青くさい恋だと親爺ぬかした

この「ぬかしたり」も上品ぶつた俳人、歌人には思いもよらぬこと、くすぐり笑いを強いる狂句を上廻ること格段、詩川柳の眼界を立派に踏みこえて、頑固さを親しく眼の前に見せてくれます。

道山

海へおちたが浅かった、ショック

で気絶でもしかけて青息吐息した

という意味でしょうが、あんまり

浅いと青息吐息どころか脳底骨折

か何んかで死んでしましますよ、

御用心御用心。

朝の道青い背広が風を切る

和枝

青い色と朝のすがすがしさ。衣料

句はこれ一句でした。よくマツチ

しています。三十年前華北でみた

勤勉な農夫たちが男女そろって青

い服をきていたのが眼に浮びま

す。

二等車に乗れば母はかしこま

り

二等も青キップでしたね。こんで

ない二等車でしようね。老母なら

ずとも手もちぶさたでこまつてい

ます。話相手はなし、三等の気楽

さをうらやむことしきりです。

信号機青列車急行安全行

登

鋼鉄の列車の轟進をそのまゝ象徴

したような漢字の一行。最後の安

全行だけが水に油のようになじめ

ません、いっそOKとやったら。

スピードの深夜の雨は青々々

柳叟

「が」ぐらいで止めた方が印象的になりはしませんか。
 ♪ 青草へ恋してはならぬ恋語り 保夫 ♪
 テニオハの「は」が気になります。「恋してならぬ恋語り」ならあたりまえのいゝ方ですが、だが恋を二度出している点から強める意味でこの「は」が入ったのかもしれません。
 ♪ 気の弱いのが値段をば聞いただけ 保夫 ♪
 同じ句主が「ば」を入れていられた

ます、この方の特長となる一つの語調かもしれませんが。他人の真似られぬ句風が出来上るものともわかりませんが慎重に研究して下さい。

「夜ばなしの議長微酔の父でよし」 幸 //

「ねだられるアイスクリーム街」 薄暑 登 //

微酔は微醺が、薄暑は初夏ぐらいが今までつかないれたことばです。造語も亦たのしですがわざとく語をこしらえるのはそれで

なければ我慢のならないだけの価値批判が必要でしょう。
 // 釘一本打って晩酌附けさせる
 北柳
 大きな坊やのおねだりです、さぞかし奥様は苦勞なことでしょう。
 // 初産にふつと涙ぐみ母となり
 洛醉
 母性の嚴肅に襟を正したくなります。
 // 修学旅行土産より無事な顔
 登
 船は沈むバスはおちる汽車まで焼ける。大事なお子さまをあずかる私も教師の一人。修学旅行なんかやめてはしくなります、ホコ／＼の時事吟。

研究題「ことば」及雑吟
 切 七月十五日
 発表 九月号予定
 授句先 豊中市本町三丁目二〇
 一 戸田古方

福壽草

定價二百五十圓
送費三十圓
菊半型・函入

本書は川柳の母藤生蘭乃女史の異色ある作品の金字塔でこの機を造したらぬび手に入らぬものである。予定數に達し次第へ切りますから御購申込まれたい。

葭乃句集刊行
について

川柳界の巨匠麻生路郎師夫人として令名の高い葭乃女史は、現柳壇に於ける巨星であるばかりでなく、闊秀作家の最高峰として、柳壇にゆるぎない地位を、確保して居られるのであります。

女史は、明治四十四年初めて川柳に手を染められ、敵父河盛芦村翁と共に、大阪柳界に伍して其の偉才を認められ、四十有余年作句精進を続けられているのであります。

す。其間、柳蒙の夫君が「川柳雄誌」の刊行、川柳図書の出版、川柳の社会進出、後進の誘導等、日なきをたすけて、ひたすら柳界の誘導等、寧ろのため尽瘁されている事は、周知の通りであります。我等は常に、川柳の母として尊敬と感謝を捧げつゝあるであります。

茲に於て、不朽洞会前理事長中
島生々庵博士の発意に賛同、女史
の句集を上梓し、弘く江湖諸彦
に頒ち度いと、ひそかに企画した
のでありますが、謙讓なる女史は
容易に、御快諾されなかつたので

あります。しかしながら襄年、我
 国川柳界に於ける世紀の聖典であ
 る路郎先生の不朽の名著旅人」が
 上梓され、その双幅とも云うべき
 「福寿草」が愈々、霞乃先生の第
 六十三回の誕辰を記念に、刊行す
 る運びとなつたのでありまして洵
 に御同慶に堪えない次第でありま
 す。

女史の作風に至つては、既に定評がありますので、今更喋々を要しないところでありますが、高度の句品と興味溢るものであることは、常に我等の推奨おかざるところのもので後進の範とするに足る粒揃ひの名句であり、不朽の名著たるを信じて疑いません。

何卒、江湖諸兄姉の御協賛をたまわりたく、左記に依り是非此際一本を座右に備えられん事をお薦めいたします。

昭和三十年三月

★出版予定日・昭和三十年七月上旬、五〇〇部限定出版
につき御申込は早く★御送金は川柳雜誌社の振替口座
大阪七五〇五〇番を御利用が便利です（切手代用可）

大阪七五〇五〇番を御利用が便利です（切手代用可）

麻生蔭乃六十三回誕辰記念

発行者

葭乃句集刊行會

委員長 北川 春 渠

刊行会実行委員 北川芳興(委員長) 武部善生(副委員長) 土井文義、岡田夏六、
員長)(以上古川) 足跡の多い「阿形」杉、櫻葉在里、木ノ下、山ノ下、
福田山(山口)、古川麓花屋、藤本、本年、福島鉄兒、福留齋、布施強川、後藤善三、網
本線南、津田久米雄、弘津柳堂、本田惠二期、平尾太吉造、石川侃評、村上清、
村澤廣、川村好太郎、黒川紫雲、菊池小松園、岡弘牛、小西無鬼、龜山晴雄、河村日
村、高根良一、水谷正樹、河村哲二、水谷秋夫、牟田一哲、宮田不二三、三賢、
藪、正木永春、丸尾潮花、水谷莊三郎、間島青丹子、森受隆、松江梅里、丸山八朗、
木本無忌、政出大介、真田一龍子、東村生々庵、西屋星、西川井蚌、西いわえ、那智光則、
中谷俊博、野村千鶴子、畠田六郎、中山茂久、大西八步、尾崎方正、大森風琴、太田眞
良子、大森幾何儀、大籠喜由、大隅盛盛、岡田祝國、須崎千秋、清水白柳子、新橋健也、
佐野哲十、飯田貴典、佐野白子、戸倉普天、月田古方、栗山昌雄、高重謙、常田
舟、友國貞山、田垣方大、田村護漢、高嶺雄雄、海野比呂志、吉田和、吉田潤水、
根白星、山田孝幸、安岡環枝郎

發行所

川柳雜誌社

大阪市住吉区万代西五の二五

電話佳吉(67)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

江戸川柳に現れた女形役者の紋(其の二)

阿達義雄

(三) 矢車と中村富十郎

『柳多留』に出て来る中村富十郎の矢車紋の句は、初代中村富十郎が死んでから、可なりの後に詠まれたもの、様である。初代中村富十郎の死んだのは天明六年(六十八才)であつた。

二代目を襲名したのが天保四年であつたことを考へ、初代の盛名などを思つてみると、中村富十郎の矢車紋は初代の影響によって詠まれたもの、様である。

それよりも、先ず矢車紋の形態だが、皿の中に八匹の小魚を放射状に並べると、之を連想させる様な恰好が得られる。

※矢車の様に並べる芝さかな

(九)

芝魚といふ名は、もと江戸芝浦辺の漁夫が捕獲したばかりの雑魚を売り歩いたことから来たものらしい。

この矢車紋の図柄は、「絵本舞台」の中村富十郎の上半身絵に於て明瞭に見ることが出来、鳥居清経の中村

富十郎「春駒」の絵、鳥居清広の紅摺絵「鏡獅子」又同人の富十郎と団十郎の立姿等の夫々の衣裳に於ても之を見られ、更に清広の「茶の湯と花」の紅摺絵に、

やぐるまや香をます梅の紋どころの発句入で、袖に矢車紋の富十郎と丸に星梅鉢の俳優の姿が描かれてゐる。

之等の絵姿は時代から見れば、当然、初代中村富十郎でなければならぬ。

富十郎は俳名慶子、紋は矢車、女形の元祖芳沢あやめの三男であつて、宝暦二年(三十三才)には、既に極上々大

吉の位付を附され、娘方・傾城・奥方・町女房等いづれとして可ならざるもの、ない名女形で、特にその京鹿子

娘道成寺は末代迄の亀鑑とされてゐる。彼は、天明六年に六十八歳を以て

大阪で歿する数年前迄、初々しい振袖姿で道成寺を演じ、人々を魅了してゐたと

と言はれてゐる。

○光陰は矢車慶子五十年(一八)

右の句を註して「慶子(富十郎)五十才にて物故」としてゐる者がある

が、誤であらう。之は「光陰矢の如し」の語を矢車紋に利かせ、「人生五十年」を初代慶子の舞台上の活躍が略五十年であつたことを詠み込んだ句と思はれるのである。彼は享保十六年(十一才)の時に既に江戸に下つて居り、再度の江戸下りの宝暦二年(三十三才)の時には、其の芸が円熟境に達してゐたのであつた。

次に、初代長谷川貞信が描いた二代中村富十郎の重の井の絵の上に、「かゝる紋のきわたつ菊のねじめかな ひとき」と記されてゐる処を見ると、其の替紋は菊であつたかと思はれる。

(四) 結綿紋と瀬川菊之丞

鈴木春信の錦絵「笠森稻荷前」を見ると、水茶屋のお仙だと思はれる若い女の左の手に結綿紋の団扇が握られて居り、その傍の若衆姿の者の右の袖蔭に半ば隠れて、もう一本の結綿紋の団扇が見られる。

この結綿紋こそは、江戸の社会風俗に曾未有の影響を与へた前代未聞の女形役者たる瀬川菊之丞その人の家紋である。代々の瀬川菊之丞の中でも、鈴木春信の錦絵に直接交渉を持つのは、二代目瀬川菊之丞であり、はじめて錦

絵の作られたのは、明和期であるから、此の明和時代は、江戸文化の進展に一時期を劃するものとして重大視し

なければならぬものである。

二代目瀬川菊之丞は、巷間には、笠

森お仙の愛人として伝へられてゐる。その真偽は別としても、春信がお仙の手に、特に結綿紋の団扇を持たせた処に深い意味がありさうである。然し、この女性はお仙と限定せず、当時の一般の若い女性の代表であると考へてもよいのである。

先づ宝暦・明和の頃、結綿紋が如何に眺められてゐたかを句によつて考察してみよう。

○もらひけり結綿付けて三代目

(寛政十一年)

之は冠附で、「もらひけり」に附けたものであるが、結綿紋の句か否かについては、未だ決定し難いものがある。もし、二代目とあれば、結綿紋句であることは疑ふ余地がない。

王子路考(王子産れの瀬川菊之丞)は菊之丞の二代目として初代の養子となり、宝暦六年その後を襲いでゐる。(実は初代が婢に産ませた実子とも噂されてゐたのであつた。)然し、宝暦の頃、既に三代目が貰はれる理はないのであるから、之を紋章句として解釈しよう

とすると、どうしても困難が生ずる。従つて右の結綿は結綿紋ではなく、たゞの結綿かも知れない。

一般に、二代目瀬川菊之丞は武州王子の産、五才の時、初代の養子となり、九才の時初代に死なれ、十才にて

初舞台を踏み、十二才に菊之丞と名乗つたことになつて居り、その歿年は安

永二年閏三月十三日、三十三才と言は

れてゐる。

○綿の出る幕へ出にくい半四郎

(明治五年)

前句「いらぬものなり」

○結綿は半四でつゝみおふされず

(明治五年)

前句「くらひことかな」

綿は結綿紋の菊之丞、「半四」は半紙とかけたものである。右の菊之丞・半四郎は時代から考へると二代目菊之丞と四代目半四郎(即ち、お多福半四郎)である。之等は、齡今や盛りとして好評噴々たる新進の女形役者の四代目半四郎も東で初めて出たといはれる名女形の王子路考(二代目瀬川菊之丞)を到底凌ぐことが出来ないといふのである。此の句の詠まれた時、菊之丞は廿八歳、半四郎は二十二歳であった。同じ条件に於て考へてみても、二代目菊之丞は空前絶後の天稟の名女形であるから、その前では半四郎も押されて影の薄くなったのも無理もないことである。

○菊之丞紋どこにまで髷を出し

(明治)

女形である故、常に髪を結び、髷を出してゐるのだが、結綿紋の恰好まで髷を出してゐる様に見えるといふのである。

○綿をおひやすと娘も若つ附け

(明治五年)

前句「定めこそすれ」
紋附の賭け事に於て、損得を顧みず

に、自分の最良する女形の菊之丞の紋に附けて賭けたことを詠んだもので、前に述べた鈴木春信の錦絵「笠森稲荷前」の中の若い女が結綿紋の団扇を持つてゐるなどと照し合はせて、当時の女性心理を窺ふべき好材料であろう。

○たばねのし釣鐘堂にのたを打ち

(寛)

王子路考、即ち二代目瀬川菊之丞は、寛延三年九月、中村座の初舞台に、十歳で石橋を、宝暦六年の顔見世に十六歳にして二代目菊之丞を襲名して、市村座に娘道成寺を、宝暦八年春(十八歳)には中村座に於て、父初代菊之丞及び叔父菊次郎の追善興行として、無間鐘を演じてゐる。それ以来、道成寺・無間鐘・石橋は、瀬川家のお家の芸みたいになつて了つた。

川柳に、

※役者の法事石橋や道成寺

(二六)

と言はれてゐるのもそれであらう。

道成寺の釣鐘堂で蛇となつた清姫がのたを打つ。その清姫の菊之丞をその紋から「たばねのし」と言つたのである。東ねた鮑髪斗が東髪斗だが、東髪斗の紋は結綿紋によく似てゐる。文化二年に出た感和亭鬼武の滑稽本「旧編帖」初編にも之について、

ば、

「こちらのしノウ見るやうな紋のうくつつけた、びすもうつくしもんんだアチア。」

忠二

「ありや瀬川路之介といふ娘形

さ。」
など、記されてゐる。尚、右の

「びす」は女のことであり、瀬川路之介は三代目菊之丞(仙女路考)の養子である。

○金元トは綿をぬくならいやといふ

(明治四年)

前句「けつこうな事」

一座の金主も、瀬川菊之丞の様な人氣役者に抜けられては、採算がとれず興行が成り立たないから、御免を蒙るといふのである。

以下に示す句は、その年代から考へてみると、三代以降の瀬川菊之丞であらう。瀬川家が女形役者の家柄として天下に名を馳せたのは五代目迄であつた。

○奥女中ひッばる綿でもめが出来

(九)

奥女中、菊之丞最良のことから遂に口論。

○結綿のよふにとむすめ島田なり

(一一)

「結綿の様に」である。

○結綿と同じ出立ちの島田ゆば

(一三)

女形、菊之丞の髪の結い方に似せて髪を結ぶのであらうが、之も菊之丞に熱を上げた結果の現れである。「島田ゆば」の語は、次の句などと合はせてみるに、之は島田崩し(し)の一種で、菊之丞の平常結つてゐた鬘の結い方ではないかと思ふ。

※法事平茶筌茄子に嶋田ゆば

(二五)

※尼寺も昔ゆかしき島田湯波

(二〇)

「湯波」は「ゆば」と読むのであらう。

なほ、つぶし島田の中央を布で結び束ねたものを結綿と言つて、之も島田崩しの一種で結綿島田とも言はれたらしく、喜多川歌麿・志水燕十作の『身貌大通神略縁起』の中に「梅花の句ひふん」と燈籠髪、結綿島田に、梅花の句は髪のお梅花香の云々」とある。次の「きせ綿」「菊」の語なども結綿の菊之丞を意識して作つた縁語仕立の狂句ではないだらうか。

○きせ綿を菊の時分に売り歩行

(八七)

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN



大坂市東区豊後町四八
立川商事株式會社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ鋼筆

一路集

売店

友淵貴山選

キャンブ村売店いち先に寝る 雪山
駅員の恋売店の菓子を食べ 鳥石
散る花を惜しみ売店ゴザを敷き 良坊
売店は皆名物と云う値段 実信
売店の夫は墜道事故で死に 徒子
売店で礼を言わない品を買 雄峯
売店へ寄ればお掛けと蜜柑箱 夜潮
売店の景気会社の景気なり 越鳥
店締めて切の一幕立見する 昇康
売店の方で割引切符売り 太路
売店で今日の本命へ丸を付け 一夜
売店は去年の客を覚えてい 葉乙女
売店にぶつき棒がよく似合い 和友
売店の品も次々春となり 季賛
売店の暇は編んでる読んでい 光郎
戸を二枚たてて売店丁いなり 誠笑
売店はぬつと穴から横に出る 木魚
山頂の売店五田の水を売り 北海
売店は居眠りの下手な美人が来 惠二朗
売店へ珠算の下手な美人が来 千容
通勤の波が割れてるとこの店 保夫
売店を覗き夕刊買っただけ 代仕男
売店に今日も昨日の餅並び 瓢馬
売店に有った見舞の品を受け 酔子
売店にだらりの帯の二人連 秋香
売店にお困りも添えて売り 一机
売店で小銭集めて土産買い 秀章

売店が故郷の名産はで見え 有子
贈られる花輪もなくて売店を出し 冗歩
売店へドテラの客は値段だけ 不二
売店へ伽藍の影が伸びて行き 玉兎
一人旅売店の娘に話しかけ 東岸子
売店で紳士に似合わぬ本を買 圭水
人波へどの売店も声を研ぎ 不二夫
発車ベル売店お金を貰い過ぎ 与呂志
売店の造花汚れて若葉映 さんたく
同じ物売店同じ様並べ 満秋
押売りもするPTAの出した店 十九平
歌舞伎座の売店でさうのれん 凡九郎
願来てそれから売店持ちなおし 古心
バス開通売店いち先に出来 五茶
売店の不覚ラムネの切れた空 ひか平
一坪に足らんお店ヘレズスター 春日
ざあざあ今日はバザアの店に立ち 阿茶
ありたけの智慧が売店飾りたて 藤波
売店の現金売が羨し 一恒
売店で買った土産の二重底 雄々
待ち合わせ椅子売店に見詰まれ 牧人
売店の「ピンチ」娘を雇い入れ 弘一郎
釣銭が切れて売店店を閉め 美能留
病院の売店までの試歩の朝 広志
売店を貰い余生を羨まれ 香林
国に子を捧げ売店細う生き 水堂
売店の朝新聞の香が匂い 芳仙
売店の赤前垂も花と消え 芳仙
売店を貰うて後家でおとし 初甫
売店の儲けを批判する患者 柳男
売店が出来て毎月差引かれ 光男
新聞を並べて食べる店の位置 素瓢
温かい牛乳売店の午後三時 雄声
売店を見てる乞食に小銭あり 泊月
売店も退庁といふ小窓閉め 別城

灰皿

弘津柳慶選

灰皿に甘党組の飴の紙 季賛
竹筒の灰皿もある公民館 達朗
落ちそうになつて灰皿持ち出され 光郎
灰皿が飛んで議場が殺気立ち 秋穂
開会はまだ灰皿へ三三五五 誠笑
客が来てまだ灰皿が見付からず 黙黙
灰皿がきれいな禁煙まだ続き 正郎
先客がまだ灰皿にいぶつて 鳥石
灰皿の位置まで幹事をつかい 良坊
灰皿を投げたこと迄判つたり 雄声
停電に灰皿ロソク立てとなり 幸
灰皿と座布団さけて村芝居 惠二朗
楽焼の灰皿個性出して焼き 梅淡
久し振らず灰皿で迎えられ 不二夫
灰皿の真上で労賃手を握り 玉兎
夏蜜柑の皮灰皿の役にして 越鳥
掌が灰皿になる野良たばこ 満佐志

灰皿の中もさらえた捜査班 春也
灰皿へ独身という豆の皮 太路
灰皿まで破つたのに吸うて 千年
灰皿を一杯にして記者倶楽部 十九平
灰皿もデフレ如実に物語り 夢人
灰皿へ白粉紙も捨てゝあり 阿茶
灰皿の位置まで秘書は気を使い 紫草
灰皿を蹴飛ばす程のあわて様 素瓢
灰皿の煙会議はもめている 省三
灰皿の新調なつて議会あく 一恒
灰皿にまでも好みの店構え 十悟
灰皿へ口紅ついたのも混り 美能留
灰皿の煙草王手に忘れられ 広志
退庁の机灰皿だけ並び 別城
小皿まで灰皿にされうらしい日 与呂志
灰皿に灰を落して独り言 香林
大川を灰皿にする渡し舟 越山
未亡人灰皿一つに気をつかい 古心
灰皿へ恋の思案はまだ続き 七面山
妾宅の灰皿掃除が行きとどき 五茶
灰皿も主人の不景気しつており 徒子
灰皿へ万年筆を振って書き 幸
灰皿を中に夫婦の仲の良さ 有子
酔ぎめの水と灰皿並べられ 東岸子
灰皿へ届かないのが一人居り 賀峰
(佳)灰皿にまで商魂をたぎらせ 藤波
(佳)伝言の紙へ灰皿のせて置き 昇康
(佳)末席の煙草小皿を当てがわれ 萬古
(佳)灰皿を挟んで労賃額らず 水堂
(佳)応接間灰皿だけで待たされる 光男
(人)灰皿がしんみり別れ話聞き 雄々
(地)灰皿の金口給仕喚うてみる 牧人
(天)灰皿が廊下にならぶ朝の宿 葉光

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確
 確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社五月句会 (大阪市)

五月十四日

午後六時

於 光明寺

作句熱が盛り上がるシーズンになった。

いゝ句を生まうとして句箋に取組む人々が早くから光明寺に詰めかけた。本日の句評は清水白柳子氏が本誌の五月号から、花村、尋四牛歩、妻太楼、幸男、千代美、梨花等の諸氏の句について語り、後ち、漢語のこなし方について述べ路郎師は、過日京都、大阪で触れられた事物の感想と新旧、川柳句の鑑賞について述べ尖端を行って解し難い句は究明し、研鑽啓蒙して、優秀句を生む心掛が必要だと柳話され、後ち席、兼題の披露に入り優賞カップは加納山茶花氏が獲得、拍手裡に散会時に午後九時。

(摩)

出席者 路郎 清潮 黒天子 水茶 山茶花 玲人 古竹 黙平 水客 紫香 いさむ 一平 一朗 雅堂 喜好 十悟 香林 東洋男 一三夫 潮花 凡九郎 ひろし 豆秋 万楽 伝一 没食子 省三 淡舟 文秋 与呂志 一十 摩太郎 賀峰 鬼辭 句浪人 白柳子 六竜

子・古方・正斗・三司・梨花・全信・尙徳・樹峯・花村・雄声・いわを・発中・堰子・花香・建美・葉光・博也・煙司・貴山・へとち・義英・泊月・霞乃

兼題「貸ボート」 麻生路郎選

貸ボート西瓜の皮が流れて来 豆秋
 貸ボート男二人はやけに漕ぎ 梨花
 貸ボートビルの谷間を漕いで行き 発中
 貸ボート女の好きな方へ漕ぎ いわを
 貸ボート一つは視野の外へ消え 煙司
 貸ボート何にすねたか一人乗り 花村
 貸ボートにらんで釣の糸を垂れ ゆずる
 火遊びのきつかけになる貸ボート 香林
 引船に又どなられる貸ボート 花村
 母の鐘聞いて慌てた貸ボート 没食子
 公園の広さを知った貸ボート 玲人
 貸ボート橋の上から野次られる 阿茶
 二次会を抜けた二人で貸ボート 水客
 道頓堀オールへほろがひつかり 豆秋
 あんなどこから妬んでいる貸ボート しげを
 貸ボート流し自省の雲みてる 水客
 煮え切らぬ恋乗せている貸ボート いさむ
 愛の巣の話ボートの中で決め 玲人
 くさかて居るとは見えぬ貸ボート 豆秋
 メガホンが沖へどなった貸ボート 三歩
 貸ボート空ばつかりを眺めてた 喜仙
 靴二足残り帰らぬ貸ボート 一十
 気がつけば一つ帰らぬ貸ボート 三司
 かき船の三味すりぬける貸ボート 潮花
 貸ボート腕は水兵上りなり 没食子
 見てるほど涼しくはない貸ボート 正斗
 貸ボート女に派手に抱き付かれ 山茶花
 アドビルの上をすべった貸ボート 路郎

兼題「アバート」 武部香林選

アバートは愛の巣箱の形に建ち 鬼辭
 なまけない今度もアバート選に洩れ たけはる
 アバートの隣は何をする女 省三
 へんぼんとしてアバートが物を干し 白柳子
 書留の声にアバート皆んな起き 堰子
 アバートで望みは捨てず共稼ぎ いさむ
 出すこへアバート意見一致せず 同
 禁男のアバート兄になって来る 樹峯
 アバートで満更でない鏡掛け いさむ
 アバートの管理もまして二号にし 古竹
 アバートで理想と違ふ新世帯 雅堂
 アバートの女相手がもう替り 山茶花
 アバートの壁で自由を支えてい 凡九郎
 アバートに住み不自由な湯を買い 日満
 アバートの窓いっぱい欠伸する 賀峯
 独身と別れアバートとも別れ 万楽
 アバートでみこしの松をあきらめる 潮花
 アバートに住んで荷馬を耽美する 煙司
 アバートに女の平和続けたく 水客
 アバートは隣へ酒を借りに行き 博也
 アバートと書かず何時何番地 古竹
 アバートの気楽さにいる共稼ぎ 一平
 アバートの二階は蝶もきて呉れず 水客
 アバートに困うて社長若返り 雅堂
 アバートの便利をはめて母疲れ 三司
 アバートに居ますと博士わるびれず 香林

兼題「街」 黒川紫香選

街へ来て子にルンペンを見てやり 貴美
 街の灯が青春の血をまねくよう ゆずる
 観光へ橋筋の朝塵埃の街 阿茶
 街に居て土を忘れぬ桜草 香林
 街に住み街に育つて庶民の詩 三司
 街に出て金にだん／＼慾が付き いさむ
 冒論の自由街の子ませている 葉光

街の子は轢かれかきても舌を出し しげお
 街角の朝は車の音に明け 一平
 街の子が自動車強盗して遊び 豆秋
 道巾がこんなに広く街が更け 十悟
 サラ／＼と画いて銀座の街になり 賀峰
 誘惑に負けた街の灯派手に見え いさむ
 街の犬つもらなさそうな顔をして 豆秋
 街角で別れた女少し酔い 東洋男
 まだ寝てる街をふもとには掃き続け 堰子
 交叉点街に不慣れを見てとられ 伝一
 街角で共同募金が待ちかまえ 尙徳
 街路樹の皮をむいて待ぼうけ 博也
 警笛へ街は夜霧につままれる 潮花
 一坪の庭にも街の陽が落ちる 梨花
 朝の街口笛吹けば澄み渡り 淡舟
 寝返りの男ひとりへ街明り 水客
 たこ焼をしても暮しいける街 豆秋
 夏になるシャツで街の手へまか 水客
 街の静けさ朝刊ボンとなり 泊月
 ビラ呉れる街にネオンの灯がどく 紫香

兼題「テスト」 新川博也選

立話ちよつとテストしてみたの 水客
 テストナンバーで新緑を乗り廻し 十悟
 応接でやんわりテストされてい 豆秋
 録音にまず拍手からテストされ 三歩
 片脚を上げてテストは真面目なり いわを
 テスト済みですと宣伝派手にやり いさむ
 逢わぬ気の技士は只今テスト中 香林
 テストする方も何だか判らない 雄声
 参観日親がテストを受けさされ 季賛
 スタイルへ自信テストにわるびれず 紫香
 隔り子のテストはとん／＼がえりし 豆秋
 テストの眼下から上へ見上げられ 紫香
 ヒットする予感があつたテスト盤 玲人

テストまだ気に入らぬ、持越され
ラヴシーンテストで月の位置を替へ
心臓は御立派ですとテストすみ
案の定おかみにテストされていた
顔できたテスト退屈して帰る
緒にいたテストケースを論議され
子のテスト妻相談にやつてくる
テストが又大変ですと技師の職
スラ／＼と言えてテストの予想点
テストしたときは現場で首を曲げ
アーアーと言うてマイクがテストされ
恢復期テストに一寸飲んでみる
テストをば受けて見よとは親も折れ
鉛筆をなめてテストの時間切れ
別居してテストケースと笑う酒
設計のミスでテストは見逃さず
テストすみ今精悍にもどるころ
表向きだけのテストで追つ払い
テストした上で親父は添わす腹
心臓が馬鹿にテストへ気を使い
キッスだけ除いてテスト続けられ
略式のテスト明日から勤めさせ
テストでは保守政党を支持しとき
席題「合唱」 西いわを選

合唱へ音痴たど手をたたくだけ いさむ
合唱の声青空へとけてゆき 一朗
メロデューが揃い指揮棒かくなり 省三
合唱になりお別れのクラス会 博也
夕焼を背に合唱の子等帰り 雅堂
合唱へ調子はずれの一人居る たるる
合唱の窓を離れて金魚売り 紫香
合唱が始まる頃に席を脱け 句浪人
合唱の隣りの部屋で立たされる 紫香
合唱をする妻若さ失わず いさむ

合唱に元宮様の低い声 玲人
合唱へ一人合わないのが目立ち 賀峰
山道を合唱で来る女連れ 紫香
合唱へニコライ堂の鐘は鳴る 三司
労使気をそろえコーラス春の唄 梨花
合唱の窓へ大きな鯉のほり 紫香
合唱へ校長さんは目をつむり 豆秋
コーラスへまだ夢を捨てない気 梨花
合唱へ一人泣いてる声が濡れ 潮花
合唱を小さく聞いているラジオ 玲人
合唱の一団地平線に溶け 六竜子
合唱の中で榮冠泣いており 一三夫
生ビール早稲田の校歌高らかに 豆秋
合唱へ父は明治のまゝの節 然平
合唱の乱れてもよし幼稚園 万楽
一流のコーラスとして引出され いわを

席題「予言」 須崎豆秋選

予言皆当って会社つぶれかけ 雅堂
戦争に敗けた予言を自慢にし 一三夫
当らねばお代はいらんこゝ予言 正斗
酔うて云う事がなにより予言めき 三司
大それた予言本人けろりと居 葉光
予言当らず株の値は下り 没食子
予言者が嬉しいことを言うてくれ いわを
予言きつちり男の児が産れ 淡舟
予言など当らぬものと思えども 紫香
予言者とも云わねばたり屋ども云われ 水茶
予言めく別れた妻の捨てりふ 一十
夜の街予言者の灯が妖気めき 一三夫
さあしもた予言の意味をさぐりあえ 雄声
新聞の予言外れた優勝旗 白柳子
一寸だけ予言が合つて見直され 万楽
予言的中それ見たことか死にやつた 古方
潮花

予言等当るものと若さなり 六竜子
予言者とも言われ変人とも言われ ひろし
馬鹿にした父の予言を思い出し 暇子
予言した通りになつて怖くなり 紫香
閑な時予言者髭の手入れをし 一三夫
予言する眉がびくりと動いたり 万楽
あほらしい予言が耳にへばりつき 十悟
気違いと思つて予言をきいてやり 豆秋

席題「しやつくり」 戸田古方選

しやつくりになつて猫が欠伸をし 山茶花
しやつくりへもうさじないも効きなく 潮花
しやつくりが話の残り忘れさせ 十悟
しやつくりをしたのがふざけ笑い出し 紫香
飛びのいてしやつくり消えた馬の糞 貴山
しやつくりが出たで女のまた笑い 紫香
しやつくりへさうしびれきらしい 一平
忘れる頃しやつくりがふとこぼり 賀峰
しやつくりの止つたこへ来た姑 いわを
しやつくりが変な処に出てしまふ 雄声
しやつくりをしし眼鏡あけており いさむ
しやつくりが止まらず茶席の外で待ち 煙司
泣きじやくりしながら怒の深い事 葉光
しやつくりをしし金を集めに来 紫香
しやつくりへアラ／＼と高島田 玲人
借りて帰らねばならぬやつりまだ止まらず 花村
しやつくりをとめてそれから深い仲 雄声
しやつくりでこまかしがらふ云いけける 梨花
しやつくりへ母のあらぬもない乳房 潮花
しやつくりの まま呼鈴へ立つてき 水客
しやつくりをしし／＼餡をしやつつてい 東洋男
しやつくりが止らず医者がもて余し 没食子
しやつくりの犬へ夫婦して氣をつかい 六竜子
しやつくりを止めて貰いに二階へ来 水客
しやつくりへ鵜呑みに吞んだ握り飯 いさむ

しやつくりの、でラヂオをきいている 古方

席題「チャンス」 正本水客選

東京へチャンスを追つて日航機 玲人
いふチャンスだつたあれから認められ 十悟
図太さはチャンスを待つて構え 白柳子
チャンス掴んでから骨が折れ 一朗
いふチャンス逃がして夢まで見ていた 花香
子には子のチャンスが有つて酔い心地 与呂志
小言云うチャンスが出来たふさふさ手 いさむ
図太さをチャンスの度に買われてい 一十
ヌーボーと生きていふチャンス見逃さず 梨花
戦災でチャンスをのがしたこにす 正斗
チャンス無くして海を渡るなり いわを
チャンスやわなぞと悪友りしをかり 潮花
母の日をチャンスに貯金函をあけ 暇子
儲かつた話は金を借るチャンス 万楽
催促のチャンスと手帖掲げて見 紫香
いふチャンス善人らしいことを云い 水客

川 淀川支部句会 (大阪市)

五月十日 於 香林居

ゴルフする身分になつて五十過ぎ 武部香林報
ゴルフ場をラッシュアワーに幅が利き 潮風
室内ゴルフへ行くとあなたと私 花村
ゴルフ場でも三等重役土を打ち 勝島
ゴルフ場草も気儘に伸びたり 東洋男
十九番ホールでかたき打つて 香林
候補者のうちは大きな口もきき 潮風
出来さうもない公約に声からし 文平
公約を大上段にふりかざし 花村
公約をせめたら解散だとおどし 中
公約は待合酒のつまにされ 中

公約は鰻の匂いかぐに似て 多久志
公約が重荷になっている閑談 水堂
こゝに耳ありどきどきイヤリング 多久志
耳遠くなつて片意地尙つり 水堂
只事でないらし耳も化粧する 保夫
メーデーも儲のうちにねり歩き 尙徳
メーデーは新聞だけで知る田舎 全信
メーデーも休みのうちへいれておき 多久志
メーデーは大蛇の如くねり歩き 東洋男
メーデーにずぼらな奴の音がかれ 香林
メーデーの朝は白米食べて行き 尙徳

阿倍野支部句会 (大阪市)

四月二十一日 於 西光寺

須崎豆秋報

區別した部屋確かめに来る幹事 賀峰
屋台店ほちく貨の客も出来 堰子
屋台店寒さ凌ぎに一寸寄り 喜仙
生さぬ子の區別氣にする他人様 唯義
屋台店訳ありそうな共稼ぎ 同
春秋を窓の幅だけみるベッド 同
屋台店バケツの水は覗かせず 一三夫
窓口のペンで達者なサインする 同
驚をきかせてドラマ春になり 好郎
新人はただうつむいて聞いた 博也
犬つれた口笛春の草を踏み 梅志
先妻の子を區別してもめはじめ 雄声
ユーモレスクの口笛掃く一人者 春巢
驚の声も入れときたいカメラ 同
寝転べば口笛になる青い空 玲人
區別して犬のめしやら猫のめし 豆秋
屈かない窓は拭かずにほつとかれ 白柳子
食道案の噂にのぼる屋台店 文秋
目の下のほくらで双生児區別され 秋良

やけくその口笛草に一人寝て 十悟
驚を鳴かし眼明きに自慢する 秋香
工場は残業と知る屋台店 万楽
何事の会議か今日は窓を閉め 同
後輩に示す訓示をノートする 水客
驚の声デパートへ聞きに行き 光二
ドサ廻り今日驚の山を抜け 凡九郎
新人という候補者の発げかかり 同
屋台店炭がおへんと店を閉じ 伝一
ニコヨンも新人はいる余裕なく 全信
出直して来る氣で味の屋台店 葉光
屋台店こんなところにいる詩人 春柳

日立櫻島支部句会 (大阪市)

五月九日 九尾潮花報

呼び捨てにして仲良は便り書く 年枝
オミットをした仲良が誘いに来 菊母
嘘ついていて仲良の氣がとがめ 花子
仲良の愚痴をだまて聞いてやり 美津子
仲良がひとり寂いで老いを知り よし子
仲良が揃えて買った舞扇 千代美
仲良が一人足りないハイキング 定美
仲良の不幸と知って落ちつけず 花代子
手ほどの三味で門付喰うつもり 里枝
名取する氣の三味線がまだ基本 ひさみ
糸つなぐ間踊子待たされる 潮花

川堺支部句会 (堺市)

五月二十日 於 摩天郎居

真実を言つて善人少し悔い 雄声
善人へ今日もあぶれる雨が降り 夢遊
善人と云われあとから腹が立ち 好郎

善人の今日は赦せぬ事を聞き 佐久岐
附馬はすごみの一寸きく男 同
附馬と意氣投合の政治論 雪山
附馬の少し不安な土堤へ来る 万楽
附馬の方が本気で呑み始め 一楽
附馬に独り暮らしを見せて置き 玲人
踏切を待つ間記念碑拝まれ 万楽
踏切でやっとおしやべり息をつき 夕霧
踏切で煙草を点けるチンドン屋 玲人
正論を通す涙は手ではらい 水客
泣顔になつて附馬撒かれて来 十悟
泣顔になつて真実語り出し 圭水
先代の写真金庫の上にあり 貴山
金庫屋に勤めた前歴あやしまれ 夕霧
奥さんが帰りヤレ／＼金庫あき 素男
先代の手腕も知っている金庫 摩天郎
風を憩い若葉のかげで聞くラジオ 同
生垣の若葉は伸びてチヨ切られ 貴山
若葉萌ゆる焦土かくしてくれるなり 香林
郵便屋さんと若葉の峠から別れ 水客
二階借せめて若葉の絹糸草 霞乃
家族連庭を二枚敷いて食べ 今雨
恩給があつて家族と別にすみ 水客
父ちゃんに風船持たす帰り途 香林
連休へ家族二班にして出掛け 武助
家族連エレヴェーターでも離れ 貴山
家族連へちとお静かに番頭が来 堰子
家族連席取る役も決めており 兎歩
家族連満員バスはやりすこし 同
ライスカレーにやるときまつた家族連 好郎
末っ子が赤で家族の洗み勝ち 圭水
ナスもう家族の様にふるまつて 狂二
家族づれ猿によく似た子もいて 光陰

池田支部句会 (池田市)

四月十九日 於 阪急本社地下食堂

菊田いさむ報

下関支部句会 (下関市)

五月八日 於 下関駅

春の味筍一つ買い添える 石川侃流洞報
人事移動給仕は知つたらしく云い 同
ハンカチボーイだから給仕にまわる ハマ子
葉桜を見に老夫妻たすけあい 豊
メートルで習い家では鯨尺 里子
呱呱の声急に空腹感じさせ 忠告
しゆんをすぎ笄夕餉の膳にのる 茂美
紙芝居体裁だけの餉を売り 土筆坊
禁煙の餉を食後の妻と替め 良坊
後二メートルメートル放送息語り 十字星
無事で居る間親にも疎遠勝ち 一規
老夫妻たんきり餉をしやぶるだけ かつる
別文の言いわけ長くなる疎遠 藤四郎

ハンサムにされた財布へ無理をする 久仁男
葉桜へもう追いまわす蟬袋 半休
皮をむいてみれば笛安らなし ポリチ
葉桜になつて静かな山になり 蘇人
ハンサムボーイ気取つて舞台へ進み出る 伊三男
紙芝居館は附録という太き 光堂
笛の赤土秤の目を稼ぎ 九呂平
館持つて帰ればメチンコか問われ 柳慶
ハンサムボーイ女難の相を得意がり 侃流洞
ハンサムボーイ二枚目さう気取り方 千里
明日喰えぬのも忘れさす呷々の声 柳蛙
ゴジラだと脊の子がかたをわしすかみ 司楼

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

五月二十二日 於 観 竜 寺 田垣方大報

真相を取らえたカメラ記事にされ 吞舟
首突驗こうまで真相ごぼらせる 完歩
真相がベストセラーとなつた手記 凡一路
本当の真相秀駒だけが知り 作吉
真相はそうだったかと感謝され 末天坊
真相を知らぬ世間が冷たすぎ 保子
もう過去として真相が語られる 東岸子
真相に触れんとすればにらまれる 寒坊
仲違ひして真相をちとしやべり 五茶
逝く母の口から真相聞かされた 風流
真相が芸者風情に暴露され 美婦適
真相と別に歴史が作られる 十九平
アリバイが崩れ真相も明ける 句醉
真相を云えばお店がなりたゝず 実穂
真相を知つてるように言ひふらし 絹子
真相のまゝで迫力と足らず 葵邸
真相はこうだと遺書で抗議する 宇柳
敗戦の真相秘話となつて出る 万古

真相は母だけ判つておる葬儀 藤波
真相を有聊無聊にした札の束 加志子
悲歎みるにしのびず真相隠して居 素身郎
真相を語つた友の疲れよう 香春
真相を明らかにせず職を辞し 流風
真相をあばいて火の粉ふりやり 満佐志
真相を知りたければとつけまされ 方大
うま過ぎる話はやはりさぎだつた 昌月
真相が寄附のことから分りかけ 縛日羅
脚色をされて真相らしくなり 牛耕
真相を知つてくくれる母があり 松太
真相をつかむ写真を拡大し 皿水
真相が解つた頃は生きていず 苦茶味
酒代にする真相を握つてい 越鳥
真相に触れた話は声低め 太公望
真相を本人だけが知らぬなり 一機
真相と告白すこし食いちがい 文珠
真相はその辺でくさくさく逃げ 多華子
真相を生神様が補足をし 千代春
真相を聞いて一肌脱いでやり 鯉鳳
自殺した真相恋にしてしまひ 青也
真相が知れてしまえばあつたし 瓢々
二十年真相秘めた細いうで 晴生
あなただけにとは真相チトもし 千富彌
当分は真相知らず願いで居 秀久坊
真相は仲人だけの知るところ 一太
真相をにぎりつぶした酒に酔い 雄々
真相を開けばきく程腹が立ち 三林坊
真相へどこまで女うなだれる 吞風
割引をして真相を聞く税吏 雄々
脚色をされて真相雑誌に出 春也
真相を知つてる者は皆無口 花蜂
真相を日記で知つた一周忌 祝郎

真相をつく質問は殺気だち 素大
真相も知らず邪教を信じ切り 美笑
下ッ端の方は真相知らず飲み まり子
真相は陛下の叱咤まで伝え 日満
真相は手鍋さげたいマダムなり 雄々
真相は妻の嫉妬の悲劇にて 路郎

川 赤坂支部句会 (岡山県)

五月七日 於 小原公民館 政田大介報

禿げている頭円満そうに見え 一流
円満にすれば姑の氣に入らず 苦石
もう糸も通らぬ歳で母は縫い 佳目夫
糸をつぐ妻の返事がう向かず 舟染
釣上げて見れば隣の糸が釣れ 芳流
ジャンクで負けて糸巻き手伝いし 水吞
選挙戦手配たのむとウナで来る 窓月
電報の誤字にみなの智慧を借り 千流
打電して置いたに出席え来て居ら 米豊年
電報の一字が違いドキツとす 三四詩
電報を打つて浮氣の宿をとり 大介
電報の様な手紙でものたらず 沐雨
電報は危篤喪服も借つて発ち 一笑
ぢまつた運名そのまま家号にし 花蜂
おでん屋へ練名のまのれん下げ 冬扇
此氣持知らず再婚すすめられ 一柳子
本當の氣持を知つた日の嘆き 宇柳
確めて置きたい氣持言いをびれ 馬洗
水道の便利も仲人つけ加え 土生
百姓へ何が便利だバスがつき 兼比羅
水道の便利さ熱い風呂で知り 直人
停車三分意中の人が見つからず 房泉

川 京都支部句会 (京都市)

五月十六日 於 仲 源 寺 田中島雀報

プチブルの希いの篇は軒をはい 長三
腰細く／＼装い風邪をひき 喜由
行楽をともしした日の写真帖 親生
バスで行つてバスで帰つて疲れて ゆきら
行楽にバスの背中也連れて行き たどし
行楽の果父の腕母の膝 紫蘭
家族向という行楽に金が入り 紫蘭
カーブしたバスこゝから磯くさし 晴芽
よき父となり水筒を肩にかけ 豊次
賭ごとの嫌いな妻にみやけ買ひ 一旺
一杯のコーヒをかける草相撲 よしろ
見るだけのつもりで行つた賭始め 慶太
賭けることよく／＼好きなどやんけんは 草之助
手袋は白しグレーの膝の線 鳥雀
音もなくグレーのセダン着くホテル 同
ライバルがグレーのスーツだからいや みのる

川 大原支部句会 (岡山県)

本田恵三朗

あきらめの酒がとう／＼愚痴となり 青美
新人の夢を抱いてエキストラ 直
新入社大学を出てお茶を注ぎ 一山
新学士はんととのデフレ今わかり 十坊
何も彼もあの字をつけたエチケット 米花
エチケットあとでアンマを呼ぶと決め 惠三朗
エチケット婚約中の氣が疲れ 一山
とつぎの声を出してエチケット 米花
秘密もう小さい胸に抱き切れず 凡平
酔うほどに妻へ悪友みな喋り 米花
その過去の秘密云うまいイヤリング 秋芳
春の雨ネオン虹を画いて見せ 惠三朗
春雨に又かん高い妻の声 平八郎

春雨へ妻は現実主義であり のぶを
ニコヨンのシャツへ冷たい春の雨 耕花

川 篠山支部大会 (兵庫県)

四月十日 小西無鬼報

保証人になってこわごわ判を押し 雀子
アメリカの保証あつての再軍備 愉多可
保証人は立派ですがと皮肉られ 洋牛
不用意に保証はしたがねむれず 千草
折詰の保証が切れる酒の席 徒然
金借りる保証は兄もしてくれず 日満
これは保証付ですとまけもせず 無聖
保証人きまり書類のやつと出来 鈴江
保証した市長職場に孤児訪ね 白猫児
父の居る社へ入るに保証いり たどし
魚屋の保証は出刃の背で叩き ひか平
仲人も保証の出来ぬ見合せ 小菊
銀行の保証それから波に乗り 香林
保証してくれたお医者が先に死に 春葉
生活の保証養子に行くと決め 紫香
保証のかぎり非ずを適用され通し 栗
あの人の保証ですかと出ししり 梅枝
情実が断てず保証の印を押す 淡舟
保証には懲りてましてさいながら 甸士
身分証村長印が真四角 たかし
親類の方が保証を断る気 いさむ
保証した予屋まで其処に居ず 基男
保証人頼まれる程顔も出来 井蛙

川 大聖寺支部句会 (石川県)

五月十四日 於 貞人居

野村味平
チャンスをと思えば情らしチャンスを来ず 貞人

よいチャンス心弱さがつい逃し 明石
国訛りへ客曳故郷をふと思ひ とよ
引手穴子は珍客を覗き込み 光郎
真相がまだつかめない捜査陣 味平
お茶の先生がきょうならさういふ拳手の札 寿子
エプロンの白さ子宝恵まれず 一恒

天井の音に動いた猫の耳 同
手に触れただけでチャンスを逃がし 醉羊
学歴はどうであらうと腕で立ち 桃園
若鮎に笹の縁が色そえて 久雄
満塁のチャンスに自信のないバツター 武富

川 木次支部句会 (島根県)

五月二十日 於 木次町役場

青いグラスで飲めば青いグラスが出さう 藤井明朗報
行楽のバス青葉から抜けて来る 明朗
初恋の女に似てゐる後向き 鶏声
後向きして連れを待つ峠道 迷調子
就職の通知は父や母が待ち 浮生
釣銭はいらぬニコヨン酔っている 清夢

川 貴生川支部句会 (滋賀県)

黄瀬美秋報

所得割ですと寄附金集めに来 四苦峯
母校からとどいた手紙寄附のこゝ 輝子
寄附の事妻に應對させておき 良一
寄附集めにらゐるをきかすのも混り 美秋
正札へ負ける負けろとねばりぬき 夢生
正直がとりえ守衛の職につき 本人
強制でない寄附ボスが集めに来 紅月
反対の声をむなしく基地が出来 迷羊
選挙戦おらが地盤のスピーカー 斗志

スピーカーここでもスリに御用心 観月
幸運の百万円へ寄附がまち 俊子
子沢山次からつきへ足袋をつぎ 柳月

川 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓報

姉上の贈の追うところ君の住む 迷窓
君のこと書いて日記も又楽し 慎一郎
メーデーのおごなし過ぎて物足らず 佐智子
結局は飲んで「子供の日」も暮れる 玲羊
家計簿を赤字にさせてもう青葉 耕生
時計気にするのが二男気に喰わず 温雄
家出までして添ったのに倦怠期 利夫
ライバルが弟だったとは知らず 直喜
今日からは同じ市になる君と僕 滋子
化粧料俸給額を上廻り 郁子
シャッターを切れば何時もの顔となり 俊一郎
釣れずかきとマツチを借りに来る 隆
囁け声も選挙日までのアセサリ 真砂人
郵便を受けて洗濯忘れられ 双影女
出目金魚お嫁にやつて退院し 加一
祈禱師に負けて柱に札貼られ 徳三文
失恋の痛手をうけた並木路 秀久
この道はアベックだけが通る道 一三
恋心いばらの道も考えず 梅林
あの頃は純情だった並木路 勤
お別れのキッスは何時も同じ道 平凡

川 宇部支部句会 (宇部市)

五月五日 於 半休居

国弘半休報
棟上が一日伸びた三りんぼ 風柳
三りんぼ今日はすっかり手が出せず 万盛

不注意の事故三りんぼで逃げ 正夢
三りんぼだった息子の入試験 天作
子や妻へ想いを馳せた港の日 戊理智
公園の一つ気になるたばこの火 青水
娘の素振り親にも解る嬉しい日 箔川
此処からが旧市ネオンの明るい灯 雪達磨
露天商 案内のよい隣 呆鴨
バナナ売り夕日をうきうき籠に入れ 笹舟
巡業は露天のために順延し 丸平
自転車に結構積める露天の荷 半休
甘茶だけですまない子供の花まつり 豊年
くねくねと娘体で意志表示 雪峰
学童の貯金の高に目を見はり 影華

川 維布 ウイロー社句会 (ハワイ)

築山快夢起報

酒癖にママがファンとなつて無事 笑有
子が孫が酒の癖まで似て育ち 伯楽
酒癖の悪い客だがよく払い 東田棧
自製して呑む酒癖の淋しかり 草一郎
弗故に悪い酒癖でもこらえ 泉水
酒癖の金へ女等眼をつむり 馬喜々
酒癖の訛びに敷居の高い事 柳葉
酒癖の出る頃合の座を外し 陽炎
酒癖が座を立ち後をはつとする 曉舟
酒癖へ母眼くばせて子を叱り 快夢起
酒癖が悪いばかりに嫁とれず 周防
酒癖を見抜いた子等の近寄らず 迷朗
酒癖で紹介状も無駄になり 不急生
酒癖に妻は無口で勝つつもり 拝山
酒癖は己に負けた者の愚痴 虹橋
酒癖は芸者を呼べと金はない 旋風
酒癖がなけりや仏と惜しまれる 影法師

酒癖が祟り縁談まとまらず しなよ
酒癖を知らず娘を嫁にやり 銀水

南海電鉄川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

徳用瓶妻の目盛りを飲み過し 十悟
牛乳を飲むさえ医者による胃腸 同
娘の顔にぬれ牛乳不服なり 圭水
奥様の心がもめる若返り 凡九郎
若返りいいのが出来た事にされ 摩天郎
宣伝は回遊券にも綴をつけ 一好
回遊券プランと違ふ廻り道 貴山
回遊券くどい程まで聞いて買 松月
回遊券温泉ばかりの名が揃い 柳庄
回遊券酒一本もついて居り 雄峯
回遊券もう一日が雨となり 貴山
回遊券花と酒とが待っている 雄声

みをつくし川柳会 (大阪市)

四月十二日

戸田古方報

仲よしも金はきつちり貸と借 圭水
使つときなと仲よしの有難さ 雄声
口笛も軽し柳の芽も青し 正斗
お好みに男同志の味気なさ 圭水
坐るところなほど連れてお好み屋 古方
夜の灯お好焼に続くなり 雄声
寺の鐘陰にこもった時代劇のぼる
寺の猫同じお経ばかり聞き 雄声
寺まわり出来る身分を嬉しが 光二
庫裡貸したこも税務署見のがま 古方
寺静か墓石憎悪の影もなし 凡九郎
名刺に組合わされた八重桜 正斗
何宗と知らず牡丹の寺とだけ 同

上役の悪趣味について行く阿呆 梨花
不自由が又面白いバンガロー 同

帝化川柳会 (大阪市)

佐野白水報

虫干へ母の形見を先に出し 一朗
迷い子の此処にいたく滑り台 京一樓
形見まで吞んでしまった春の宵 雅堂
娘には形見の柄が気に入らず 京一樓
花ぐもり迷い子と喧嘩見て帰り 雅堂
当たら百万円という魅力 辰始
花ぐもり下戸は傘持つ役になり 葉乙女
氣象台手こづらせてる花ぐもり 一平
行儀作法一通り出来日陰もの 与呂志
道楽も一通りして世故に長け 三平
百万円になる馬の差で敗れ 白水

333川柳会 (堺市)

五月三日

於島野工業K・K
川村好郎報

妻と子のうどんの傍で晩酌し 素男
口止めのうどんへ酒もついでる 雄声
風食接待素うどんでごまかされ 元歩
団交の席へうどんのゆげが立ち 俊平
メーデーの集合場所でもう疲れ 貴山
メーデーに社長晩まで寝るのさめ 広平
メーデーの鳥合の衆にいる哀れ 夕霧
セーラー服でパイットの紅なつて 元歩
恋愛も制服同志よく目立ち 貴山
制服が飛田を小さくなくて行き 夕霧
すった日の競馬のボスターうめしく 春水
ボスターに地図まで書いてお越し 比呂坊
ボスターの切られる役も目玉むき 貴山

ボスターのシーンはカットされてなり 元歩
落選はボスターはがしに來てくれず 一楽
ボスターが切れた話題を取りむき 雪山
ボスターがこの貧乏をかえりみず 霜也
表戸が開いて辛抱爆発し 狂二
平社員メーデーだけは指揮をとり 雄声
つぎあてた服に素直ないじらし 一楽
辛抱もせずに給料ばかり云い 子母

川柳 おたまじやくし句会

(天理市)

五月一日 於 よろず相談所病院
菱田満秋報

内職のミシンもデヤズのリズムなり 季生
内職の造花に春は飾られて 貴通
誘惑に負けず親子の袋はり 千年
破れものの様に全快あつかわれ 満秋
新薬は全快すると書いてない 西本
退院へ要いそくと迎えに來 西本
全快の婚しきカルテくって見せ 花鶴美
柳友の病むを気にしたまま無沙汰 潮花

川柳 阪東ベルト川柳会 (神戸市)

飯尾寄与史報

待ぼうけへ吸殻一つ一つふみ むめい
十代のタバコ世間の目が光り 松風
残業へ一息入れるタバコなり 三平
僕のを待つていらしモク拾い いさむ
たまに喫りタバコピースでひやかされ 樹
タバコ屋が電話をおいてはやり出し 柳坊
タバコ銭のこしてあごを貸してやり 歩ッ歩
禁煙の札を横目でタバコすい 峰月
静養でタバコたれたる身のつらさ 凡人

季節一品料理

江戸前にぎりすし

アベノ橋地下映画食通街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第五十三回)を募る

兼題「岡惚れ」 路郎先生選

締切・七月十五日 句数五句以内

発表・七月二十一日(店内掲示)

投稿は 阿倍野区松崎町三丁目

一〇 大万川柳会宛

社の黒板

目覚が止んでいびきが高くなり さなぎ
吊皮の時計となりの客がよみ 寄与史
逝く母へ時計の音がまだつづき 同
急行にひかれ時計は無事だった 比加留
目覚にとりなる部屋が目をさまし 同
朝炊の妻は時計が気にかゝり 美喜坊
遠足に時計は五時にねちをかけ 村雨

★麻生霞乃女史の句集「福寿草」の刊行
が予定通りに出来なかったことをお詫び
申し上げます。実は既報のように選挙の印
刷物で印刷屋がテンテコ舞、引續いて労
働争議がおこって空しく日を潰した訳で
あります。遂に印刷屋を変更して上梓を
いそぎ漸く刊行される運びになった訳で
本誌がお手許へ届く頃には出来上ること
になって居りますから遅くとも七月上旬
には発送いたします。御諒恕下さい。

霞乃句集刊行委員会



編輯室にて

★真夏のような暑さが毎日続くので、編集の仕事も決してラクではない★内の用と外の用とで引張りダコ散髪に行くヒマもない、全くてんやわんやである★五月に倉敷へ、六月に岡山へ出かけた。岡山県は御郷里ですかと云われている★七月十日は川柳の川柳祭だ。浴

不朽洞

会から

▼路郎師は七月十日午前六時四十五分からJOBK第二放送趣味のしおりの時間BKK川柳の会課題「シャツ」の選評をされる。
▼水本無氏(大阪府)は五月十日附で南海電鉄尾崎駅長から岸の里駅長に栄転された。▼阿形一杉氏(大阪府)は今回南海電鉄岸組委員長に就任。▼長野井蛙氏(山口市)は五月十三日新宮灘、鬼ヶ城を巡り翌十四日楠公史跡千早城跡に登山、同所から「楠公も飲んだ清水に渴を医し」の句信を寄せられた。▼福島鉄児氏(岡山県)からの消息によれば井口寿人氏(元久米南町元参事)は今回目出度く弓削町長に当選。在里如水氏に続いて、二代の柳町長長流石に川柳町である。お慶び申上げる。
▼尼緑之助氏(出雲市)からの消息によると出雲支部創立三十年記

衣は出来たが。手拭はまだこれからであるハバ。★潮花の女流作家インタビュが大きいうける。あちこちからチト遊びに来て頂戴に、目をバチクリさせている★川柳の女性作家は陣居や潮花が考えているよりモット多数の存在だ。雅号が男性化して来たのでお気づきにならないらしい★自由朗氏から川柳脚の脚本が届いているが、原稿フクソウで次号送りになっている。モ少し待って欲しい★川柳には派閥はない。どなたでも脱された。どなたでも寄稿されたい。(路)

念川柳大会を明秋開催目下計画中の事。▼藤井春日氏(倉敷市)から過般開催の倉敷支部川柳大会の際の路郎師揮毫記念団扇を喜ばれ「佳句一つ残せと団扇に漏がれる」の句信を寄せられた。▼阿万氏(大阪府)の母堂が逝去された。謹悼。六月二日四条の自宅告別式執行され本社から路郎主幹水客、青丹子氏等焼香。阪田良坊医博(下関市)は五月廿二日に九州医学会が別府で開催されたので中国地方の代表として出席され日名子へ一泊された。▼河村日満氏(鳥取市)大西八歩氏(鳥取市)今回日本海新聞社の依頼で文芸特集欄に「つまる川柳」八歩氏は随筆「方言」を執筆寄稿された。▼岩崎一伸氏(大阪市)は今回医学博士の学位授与の栄を担われた。▼前山北海氏(東京都)は五月十八日来洞路郎夫妻と歓談され即日帰東された。▼渡辺孫拙医博(大阪府)五月十四日狭心症で急逝された。謹んで悼む。同氏は大阪市交

通局病院院長を勇退後身体障害者協議会顧問として奔走の傍ら年来熟考中の「日本放射線分科史」編纂中逝去、日本レントゲン界の權威者であつただけに痛惜に堪えない▼三鴨笑氏(米子市)に米子支部で川柳祭の準備にかゝっていること、市の中央に川柳会館を設置、他の川柳支部の柳が気軽に来米されるようにされた由。▼山田季賛氏(広島県)は四月十三日病氣急快退院同月廿九日から三日迄滋賀県へ帰省、北川泰博氏に面談の上帰京された。▼志水礼司氏(大阪市)は五月十八日に長男礼一郎君をもうけられた。▼中島生々庵氏(大阪市)宅の電話局番が六月四日から大阪局三九八四番に変更、七月二十日から大阪局三九八五も開通される。▼弘津柳慶氏(下関市)の通信によると六月十一日に松川不水氏の訪問をうけたが突然の公用でゆっくり話せなかった由、なお十二日下関支部の句会で七月十日の川柳祭の打合せ会があつたと。▼丸山弓削平氏は家庭の事情上五月限りで退会された。▲石岡正司氏は六月限りで退会。▼鈴木天貧氏は家庭の事情で六月限退会された。(摩)

通局病院院長を勇退後身体障害者協議会顧問として奔走の傍ら年来熟考中の「日本放射線分科史」編纂中逝去、日本レントゲン界の權威者であつただけに痛惜に堪えない▼三鴨笑氏(米子市)に米子支部で川柳祭の準備にかゝっていること、市の中央に川柳会館を設置、他の川柳支部の柳が気軽に来米されるようにされた由。▼山田季賛氏(広島県)は四月十三日病氣急快退院同月廿九日から三日迄滋賀県へ帰省、北川泰博氏に面談の上帰京された。▼志水礼司氏(大阪市)は五月十八日に長男礼一郎君をもうけられた。▼中島生々庵氏(大阪市)宅の電話局番が六月四日から大阪局三九八四番に変更、七月二十日から大阪局三九八五も開通される。▼弘津柳慶氏(下関市)の通信によると六月十一日に松川不水氏の訪問をうけたが突然の公用でゆっくり話せなかった由、なお十二日下関支部の句会で七月十日の川柳祭の打合せ会があつたと。▼丸山弓削平氏は家庭の事情上五月限りで退会された。▲石岡正司氏は六月限りで退会。▼鈴木天貧氏は家庭の事情で六月限退会された。(摩)

正誤
▼近作柳樹の作家、石本一子さんの姓が右本と誤植されたので訂正する

柳人交歓暑中廣告を募る

9都に共通

3000円
5000円
10000円
20000円
30000円
50000円
100000円

商品券

大阪・東京
京都・神戸
高知・鳥取
下関・別子
博多・共通

大丸
大阪心斎橋

Printed in Japan

募集

課題吟募集

支 弘 (廿句) 小川 恒明選
吟 (廿句) 松江 梅里選
(七月二十日締切)

山小屋 (廿句) 黒川 紫香選
宣伝部 (廿句) 寺井 鋭々選
(八月二十日締切)

投稿規定

★投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
★「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
★「課題吟」は何人でも投句が出る。
★「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第十巻 第七号

定価 四〇円 (送料四円)

半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円

昭和三十年六月廿五日印刷
昭和三十年七月一日発行

大阪市住吉区南堀内代四十五丁二五番地
行徳屋 麻生 幸二 郎

大阪市住吉区堀内代四十五丁二五番地
発行所 **川柳雑誌社**

電話 住吉 六〇八二
振替口座 大御 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 338

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

**高血圧を
忘れよう!**



サーピナ錠

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠! 成分含量も多くてお得です




**詩と夢の島
友ヶ島**

木曾馬 ポート遊び 磯遊び
カメラハイキング 魚つり
海水浴 キャンプ 放鶴の
日本狼 トカラ原始山羊 リス
などと バラエティに富んだ
一日を楽しくすごせます

セントラル ロッヂ
バンガロー・なぎさの
家・サンマーハウス
デント.....開催中

**南海
電車**

大阪名菓
もりかんのり
源氏いも餅や

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話 三四〇九



重宝で待つてゝねえと
今日も誰い 路郎

廣 東 科 理

蓬 策

大阪 なんば